
お金持ちのお嬢様がやってきた

川部

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お金持ちのお嬢様がやってきた

【Nコード】

N1596R

【作者名】

川部

【あらすじ】

7年前に引越した。

幼馴染が主人公の家にやってくる

だが主人公はそれを認めないのであった。

戻ってきた。(前書き)

感想をお願いします。

戻ってきた。

とある一本の電話が俺の人生を変えた
災厄な物に

「ふぁーおはよう母さん父さん」
ふと気が着くと家の中には俺しか入なかった。
あれ確か今日は皆家に入るはずなのに何処行った。

まあいい

今のところ俺一人ゲームやりたい放題出来るぜ
すぐさま階段を駆け上がりパソコンのスイッチを入れた。
今しているゲームはクエストと言うゲームだ。
皆と協力してやるゲーム

「今日はどのステージに行きますか」と

今日はドラゴン倒しに行きませんか？

今日はドラゴンか

行きましょう

ブルル---

携帯が成ったのである

何でこんな時にしかも知らない番号だし
イヤホンを付けてと

「はい。もしもどちら様でしょうか？」

「私だよ」

誰だよ

「あのう誰かと間違えてませんか？」

「いや間違えては無いよ。夢下 香月でしょ」

何で俺の名前知ってんだ

「だから一体誰ですか？」

俺は怒りを抑えながら耐用した。

「カナデだよ。」

「何で俺の携帯番号知ってんだ。」

「香月のお父さんとお母さんに聞いた。」

父さん母さん何で人の携帯番号教えてるんだーーーーー

俺は即座に電話は切りゲームを再開した。

ブルルル

ブルルル

ブルルル

ブルルル

「しつこい」

「酷いじゃないのよ電話切るなんて」

お前の方がヒデーよ

人がゲームしようとして入る時に電話掛けてくんだからな

「カナデって確か引つ越したんじゃないやありませんか？」

「引つ越したよ。そして帰って来た。」

もう一度アメリカに帰れ

その言葉を心の中で叫んでいた。

「何で帰って来たんだ。」「約束したから香月と約束したから」

そいやーそんな事有ったな

小学生ころカナデと俺は良く遊んで入ったんだ。

でも、5年生の時にカナデはアメリカに引つ越すと聞いて俺はカナデに言ってしまった。

「また帰ってこいよ」

「香月の誕生日まで入たかったなー」

「はいこれ」

「何来れ」「誕生日に成ったら行つて見て」

俺は地図と鍵を貰ったんだ。

そしていま住んでいるのがカナデから貰った家である。

カナデの家は異常な金持なのである

だから誕生日に貰ったのは家である

まあ、家が貰えて嬉しかったけど

そのあとカナデは引越した。

あれかーあれが行けなかったのかー

「窓開けてみて」

俺はカーテンを開け道路を見たときそこにはカナデの姿があった。

ガラガラ>

すぐさまカーテンを閉めた。

ガラガラ<

「何でカーテン閉めるのよ。」

「お前が来るとなると色んな物持つて来るじゃないか？」

「今日は何も持つて来て無いよ。」

「だから玄関の鍵開けて」

可愛らしい声で言われても困るな――

「分かったよ待つてろ」

「わーいありがと香月」

階段を降りて玄関の鍵をがっちり閉めた。

「香月今の力チャって何の音なの」

「当然鍵を閉めたに決まってるだろ。」

はははこれで貴様は入ってこれ間合い小娘が

何処かの悪キヤラ見たいな事をしてしまった。

「じゃこつちも実力攻守させてもらうよ。」

何言ってるんだコイツ

ガチャ

「あれ今の音はまさか!!」

「お邪魔しまーす。香月来たよ」

え・・・何ではいれんだよ

「今何で入れんだよって思ってるでしょう?」

何故ばれた

こいつは超能力者か

「だって私此の家の鍵持ってるもん」

「何故持つてるんだーーーー」

大声で俺は叫んだ。

落ち着け俺見失ったら俺の負けだ。

「香月のお父さんに貰ったの」

あのや로도「いい加減にしろーーーー」

「香月今日から私此処に住むからよろしくね。」

「そうか分かった分かった。」

「え・・・えーーーーー」

「ーーーー」

これが俺の楽しい日常をコイツが奪うので有った。

転校生はお金持ち（前書き）

悪い所がありましたら
言ってください。
直しますので

転校生はお金持ち

「起きて香月」

「ふぁー誰だお前？」

「ヒドイ昨日一緒に寝てあげたのに」

何言ってるんだコイツ

カナデ何が何でも家か追い出さねば
どんな手を使っても

俺は素早く着替え家から出た。

「行つてきまーす。」

これで学校に入れば安全だ。

僕の勝ちだ。

「待つて……香月」

香月貴方は絶対に私からは逃げられないわよ

学校に到着した香月は

「ハアハア・おはよう皆」

「おはよう香月」

皆が同時に俺にあいさつしてきた。
何で皆同時？

「香月どうした？」

彼は俺の友達の絆である

言えない絶対に言えない家に金持の美女が入るなんて

「いやー遅刻すると思って」

「そうか目路らしいな？」

「あははは」

今の俺には笑う事しか出来なかった。

「はい皆席についてください。」

担任の新藤先生だ。

「今日はクラスに転校生を紹介します。」

俺は此の時嫌な予感がしてたまらない為
皆と先生が転校生の方を見ている間に

ベランダに出た。

「入って来て。」

「どうも井上 香奈出ですよろしくお願いします。」

「あれ香月君は今日は来て無いんですか絆くん？」

「いえ入ますよ。あそこ」

皆が一斉にベランダを見る

何で絆そこで言うんだ。

しかも転校生はお前かよ香奈出

「香月ーーーー！」

「げ・・ヤバイ逃げろ」

俺は二階から飛び降りた。

スタ

今日は美味しく飛べたな

「香月君個々は二階で・・すよ」

「大丈夫です香月はこれくらい余裕ですから」

香月言ったでしょ貴方は私からは逃げられない

学校の校庭の中央くらいで止まり電話がかかって来た。

誰だろ

「どちら様ですか？」

「香月逃がさないわよ」

何を言っているのかコイツは

今さら追いかけても追いつけまい

「逃げれるさ」

すると

向こうで指を鳴らす音が聞えた。

まさか・

「俺は何時の間にか黒い服を着た奴らに囲まれていた。
何時の間に

お前らは忍者か！

「逃げれる物なら逃げてみなさい。」

ブチ

ブーブーブー

逃げてやろうじゃないか

俺はな生徒会長に色んな部活に入れて言われ全ての部活をやり遂
げた

男だぞなめるな

黒い服を着た奴らが一斉に襲いかかってきた。
逃げるが勝ちだ。

俺は門までダッシュしようとしたところ

ピンポンパンポーン

「あ・あ・テストス香月ちゃん何してるの？」

生徒会長か

俺は大声で

「瑞希会長いちいち放送室から俺の名前を呼ぶな—————
！！」

この学校の会長は毎回毎回俺を呼ぶとき

放送室を使つて呼んでくる

いい加減やめてほしい

「香月ちゃんこれから君を捕まえに行くからね」

やばい会長が来るとならば急いで学校から出しつせねば

急いで門に向かったけど

もうそこには会長の姿が会った。

どうする本当の意味で囲まれた。

「香月ちゃん逃げれると思ってるの？」

二文字の言葉で俺は言う

「思う。」

「じゃ私が捕まえたら私の願い聞いてくれる」

「良いだろうその代り俺が逃げ切れたら生徒会を止めさせていただきます。」

俺には策がある

あそこにある網を上に登れば出しつできる
なぜなら会長は女子

上に登ればスカートの中が見えるから上がってこない

「良かるう」「じゃ約束ね」

これはあそこを使って出しつするしか？

学校の網までダッシュし始めた。

「うおおおー！」

ひたすら走り

網がある所に着いた。

急いで網を上に入り逃げる。

だが

「香月ちゃんそれで私から逃げれると思ってるの？」

「え・・会長スカートの中見えますよ!？」

「大丈夫だよほら」

スパツ

俺の作戦が――

あ・・かくして香月は会長に捕まった。

「放せ――！」

「先生香月ちゃん連れてきました。」

何爽やかな顔で連れてきました。

ガラガラ<

よし会長は入なくなった。

「絆カッターナイフ持ってるか」「ああ。」

さすがだ我が親友

「貸してくれ」「おう。」

「ほい。」

机の上に置きやがった。

なめとるだろコイツ

「これじゃーロープが切れないだろ」

そう言つと俺の手に渡してくれた。

これで逃げれるぞと思つたが

ぎいー！

「あれ切れない何故だ。」

これはロープのはず

後ろを確認すると鎖で繋がれてる

会長のやろー

だがまだ策はある

「絆やすり貸してくれ。」「おう。」

「ほい」

同じ事を二度言わせる気か貴様は

「冗談。」

俺はやすりで鎖を必死に頑張つて壊した。

そつしゃづづいてロープ

だがさつき貸して貰ったカッターナイフがある

すぐロープを切り

「やったー」

キンーコンーカンーコン

いいタイミングでチャイムが鳴った。

よしこれで脱走を

香月に今日の晩飯何が好いか聞かなきゃ

「ねえ香月」

「香月知り合いか？」

「あのう誰ですか？」

香月やるわね

「しらを切り募りですか？」

「だから貴方は誰ですか？」

此処までしておけば知り合いと思わないだろう皆

「香月これは何ーだ。」

「それは俺の携帯番号・・・あ」

「香月やっぱり知りあいなのか？」

もう駄目だ。

しかたないあきらめるか

「香月ちやーんお昼食べよ。」

ナイスタイミングいです会長。

「会長毎回毎回来るのは止めてください。」

この人は近藤 瑞希この学校の生徒会長をやっている
俺がこの人に会ったのは入学式の事だ。

「なあー絆」「何？」

「面白い事あるかな高校って」

「あるだろ多分。」

「そこの君たち名前は」

急に誰かに呼び止められたんだ。

それが瑞希会長だ

しかも君達はこれから生徒会に入ってもらつよ。
拒否権は当然無かった。

「お昼食べよ。」

う・・・

会長は美人だ。それに人気もある

他の奴らの視線が痛い

「分かりましたから。絆行くぞ」「了解。」

そのときはもう香奈出の事は忘れていた。

いや忘れてなかった。

「優香副会長、美味しいですね。これ」

このお方は煽動　優香さんです。

俺らは今屋上で昼飯を食べている。

「そうですか？」

「はい。とても美味しいです。」

優香副会長は可憐な人だ。

しかも料理が美味い

「絆ー食わないのか？」「僕これがあるから。」

何だろう

いつもと様子が違う気がする

まあいいか

「香月ちゃんご飯食べさせてよ？」

すんごく

エロい声で言われても

「自分で食べる」「酷いご飯くらい食べさせてよ」

仕方ない人ですね

「口を開けてください」

会長が口を開き

ご飯を食べさせてあげた。

「美味しいね優香ちゃんのお弁当」「そうですね。」

「あ・そうだ。」

「確か来週テストだよ香月ちゃん」

「テ・・・ス・・・ト？」

「うわああああ勉強してねーーーーえ」

「つか忘れてた。――！」

俺は親友に頼んでみた。

「頼む勉強を教えてください？」

「OK、」

さすが我が親友

とても優しい。

あと副会長に勉強の事を頼んだ。

「優香副会長お願い致します。？」

俺は優香副会長に土下座をして頼んだ。

「頭を上げてください。分かりましたから」

「あ・ありがとうございます。」

会長がとんでもない事を言い始めた。

「今日から香月の家にお泊まり勉強会をしよう。」

一体この人は何を言ってるんだ。

「会長何言ってるんですか？」

「だって勉強会と言ったらお泊まりでしょ？」

この人の思考回路は、おかしい

「違うと思います。」

「しかも男女が一緒に泊まるなんていけないと思います。」

これでさすがに会長も来るとは、言わないだろ

「ふふふ・香月ちゃん？」「はい。」

「約束」

約束？

あ・・・・・そお言えば

「拒否権は？」「無いよ」

そこで

ガチャ

「香月入た入た。」

「げ・・カナデ何で此処が分かった？」

「香月のお父さんから電話」

父さんから電話？

「はい。もしもし」

「香月食費振りこんど入たから」

それだけ「父さん何時帰ってくるの？」

「あと348日帰らないからじゃ」

ブチ

「分かった。」

え・・348日

一年が365日もろ一年帰って来ない気が

「ほい。サンキュウ。カナデ」「うん。」

「香月そちらの方は？」

「あ・・すいません」「私は香奈出と言います。」

「香月くんのお家にお世話になってます。」

皆が一瞬にして固まった。

「香月ちゃんどう言う事？」

「それは・・その」

何でコイツ今言うんだよ。

「妹なんです。実は」

俺は今必死になってごまかしている。

「ああ。妹さん」

納得してくれたか。

「じゃ香月」「何？」

「香奈出さん何で転高してきたんだ。あと名字も違うし」

絆さんそこは普通聞かないでしょ

だがあきらめない

「母さんが生活がキツイから友達に預かって貰ってたんです。」

「ああ。そう言うことか。」

「これから香奈出事皆さんよろしくお願いします。」

ふゝ

何とか乗り切った。

「所で何の話をしてたの？」

あ・・そうだコイツにも話をしておかないと

「今日から皆が泊まりに来るから」

香奈出何でなのと言う表情をする

怖い

「勉強の泊まり会」

「ああ。」

ふん俺に不可能な物は無い。

多分？

「何時に集合ですか？会長」

「6時に香月の家で」「分かりました。」

帰りに銀行によらないと行けないな

転校生はお金持ち（後書き）

次回お泊り会
感想をください。

お泊り会（前書き）

楽しいと思うので見てください

お泊り会

今学校の帰りに銀行によるところだ。

「ハア」

ため息を着きながら何で皆が泊まりに来る話に成ったんだ。
考えてみると俺のせいかなー

「香月銀行着いたよ。」

俺の隣に入るのは香奈出です。

逆らうと怖いので全て許しました。

「うん。サンキュウ。」

俺は銀行の中に入り

金を下ろすためにエーティーエムに向かい

カードを入れ相性番号を入力した。

俺は残金がどれだけ有るか確認するために残りの残金を押した。

え……

一・十・百・千・万・十万・百万・一億・十億円

「何じゃこりやー」

俺は着いお金の量が有りえない金額だった為大声で叫んだ。

「香月どうしたの？」

「香奈出見る個のお金」

「ふーんこれだけか」

え……今これだけかって言いませんでしたか？

おかしくありません。

十億ですよ。これだけ合ったらゲーム大量に買えるよ。

「香奈出これ何？」

「だから食費でしょ。」

これが食費？

マジで

「どうか去れましたかお客様!!」

あゝあ店長が出て来たよ。

「あ・貴方は香奈出様入らしゃってたんですか？」

「うん。香月が来るって言ったからついでにね」

香奈出お前は何処まで知られて入るんだ。

誰か教えてくれ

そのご

俺は銀行からお金を引き出し

スーパにより皆の飯の材料を買って帰った。

その前に

「香奈出先に帰っててくれないか？」

「どうして？」「これからちよつと寄る所があるから」

「じゃ私も行く。」

くそ

何とかして振り切らないとゲームが買いに行けない。

何か何か無いのか

そうだ。

「風呂に水溜めてくれないかあと沸かしといてくれないか？」頼む

？」

「香月がそこまで言うなら」

やったー

ゲームが買いに行ける。

「また、後でな」

俺は香奈出に手を振る

「うん。」

香奈出は走って家に帰った。

俺は迷わずフタバに行き欲しかった。

ゲームを買って帰った。

「ただいまー」

「お帰り香月ちゃん」

「げ・会長何で入るんだ？」

「あ・泊まり会か」

「ゲーム買うのに夢中に成ってたから忘れてた。」

「香奈出は？」「風呂沸かしてるよ。」

「良かったー」

「取りあわず着替えてきますね会長」
「すると会長は」

「香月ちゃん会長は無し瑞希でしょ」

「学校じゃ無いんだっけ」

「難しい会長の事を瑞希って呼べない」

「瑞希さんでいいですか？」「簡便してあげよう」
「ありがとうございます。」

階段を上がり自分の背に行き服を着替えた。

「ゲーム・ゲーム部屋に置いとかないとな？」

「誰にも知らない父さんの部屋と書いて有るけど」

「実はゲーム部屋」

「これでよしと」

「下から俺を呼ぶ声が聞えて来た。」

「香月ちゃん香奈出ちゃんが大変？」

「何だって風呂大丈夫か？」

「俺はもちろん香奈出より風呂の方が心配です。」

「大丈夫か？」

すぐさま階段を降りて風呂を覗き込んだ時
「香月沸かしてたら泡が一杯に出てきて」
ハア」

風呂洗う時石鹸が取れて無かったんだな
俺も昔はよくやった。

昔だけだな

「もういいからリビングで休んでろ」

ハア

どうやってたら風呂全体に泡が行くんだ洗うの大変だな
腕まくりし「よし。やるか」

こう結う事は慣れて入る為10分ほどで終わった。

「これでよし」

風呂も沸いたしOK。

ピンポン

あ・誰か来た。

玄関え行き扉を開けた時

俺は美人を見た。

「優香副会長ですよね?」「はい。あと副会長は入りません。学校
じゃないでしょ」

また、やってしまった。

「上がってください。」

「邪魔します。」

どうぞどうぞ

「優香ちゃんやっとなんだ。」

「まだ5時20分だよ瑞希。」

「そうだったね」

6時に集合って言ったのは誰だ。

「それじゃ僕は上で遣る事があるので」

「『何にやるの？』」
うわ

破壊力ある皆同時にか

「皆の布団出さないと行けないだろ」

ごまかすのが美味くなつたな俺

もしかしたら俺の将来は詐欺師

何考えてんだ俺は

「『私も手伝う』」

もう皆同時は止めて

「大丈夫だから晩飯の準備をしといて」

「はい。」

これで自分の部屋でゲームができる。

新しく買った奴は、皆が寝た後で使用

再び階段を上がりパソコンの電源をいれクエストを始めた。

今日は何処に行きますか？

今日はゴット・ドラゴンはいかがですか？

行きましょう。

ん・・神のドラゴンそんなの此のゲームに入たんた。

くそ・・強い

神のドラゴンだけは有るな

回復よし

コンコン

「香月ちゃん「さん？」」

俺はヘッドホンを付けてゲームをしていた為何も聞こえて無かった。

くそーー

負けた。お疲れです。

パソコンの電源を切りヘッドホンを外した瞬間嫌な予感がした。後ろを振り向くと瑞希さんと優香さんがいた。

凄い何て恐ろしい顔だ

顔を見て入るだけでもわかる

何に自分だけゲームしてんだ。

と言う顔をしていた。

「香月ちゃん」さん」

「はい。」「ご飯出来たよ。あと皆来たよ。」

怖い怖い

恐ろしい声で言って来た。

「わ・・・分かりました。」

階段を降りて見るとそこには皆そろって入た。

「絆来てたんだ。」

「香月ちゃんが上でゲームしている間に来たの。」

「はい。すいませんでした。」

謝った。だが怒りを止まって無いようだ。

「いただきます。」

あ・・・人が食べれる物じゃ無い。

有りえない味だった。

多分俺のだけ

「ごちそうさま」

「香月もう食わないのか？」「うん。」

食えるかこんなもん。

誰だ作ったのは？

「これ誰が作ったの？」

「私！！」

笑いながら瑞希さんはこっちを向いた。

犯人はお前か！！

「明日の朝飯は僕が作ります。」

なぜなら瑞希さんに作らせると俺のだけが不味くなる

「香月さんは、寝ていても構いませんよ私が作ります。」

なんて優しい優香さん

「いえ、僕も手伝います。」

皆が食事を終え勉強を始めた。

もちろん俺の部屋で

「これでよしと」

今日の宿題終わり。

瑞希会長のヤル気まったくゼロ

香奈出と絆と優香さんは真面目にしている

むろん俺も

瑞希会長は俺のマンガを見て楽しんでいる

バカかコイツは

心の中だけ瑞希会長に文句を言った。

「9時かそろそろ布団でも敷くか」

「うん。そうだね。」

会長が真っ先に言って来た。

何をたくらんでいる。

「瑞希さんもしかして此処で寝る気ですか？」

「そうだよ。」

「男女が一緒の部屋に寝るなんて無理です。」

絆ナイス

「泊まり会と言ったら皆で同じ部屋に寝るでしょ」

寝ないよ

バカ会長

「寝ません。」

「いや、絶対に此処で寝る」

何言っても効き目が無い見たい

「仕方ないですね。じゃ女子はそっちで寝てください。」

「えーーーーー」

何だ今度は？

「皆で一緒に寝ようよ。」

ハア〜〜

「おい。絆どうする」

「じゃお休み」

「絆ーーーー」

おしいれとは考えたな

一番安全なところを奪え荒れた。

くそ・・・裏切り者

「女子は俺を挟むように寝た。」

皆が寝た事を確認しゲーム部屋に向かった。

「やっと出来るよ。」

今からやるゲームはテイルズの最新作だ。

ソウハジン

「すげーめちゃくちゃカッコいいし強い」

ふう今日はこれくらいにして寝よ
疲れた。

明日からは普通の日常に戻る。

お泊り会（後書き）

次回またお泊り会

悪い所は治りましたか？

少しは良くなったと思う人は感想をください。

またお泊り会（前書き）

見てください

またお泊り会

「ん」

何か良い感触が腕の辺りに

ムニユ

「あ・・・」

何だ一体？

何で隣に優香さんが僕の隣に入るんだ？

「って何で此処に入るんですか優香さん？」

小さい声で質問した。

確か優香さんと香奈出と瑞希さんは確かあっちの方に

「起こしに来たんですよ。朝ご飯の私宅しないと行けないでしょ」
そうだった。

皆の朝飯作らないと

「あ・・・ありがとうございます。」 「あと内緒にしてあげる香月さん」

顔を赤くしながら優香さんが言う

「内緒？」

あ・・・俺もう死んでもいいや

心の中で呟いた。

階段を降りて

料理の私宅を始めた。

「え」と・・・優香さんは味噌汁をお願いします。」

話し掛けにくい

さっきの件もあるし

「分かりました。」

今日は？

冷蔵庫の中身を見て朝飯の食材を決めた。
魚に味噌汁とサラダだな

10分後

「完成。」

さすがに5人の飯を作るのは、大変だった。

「香月さん凄いです。」

「そうですか？普通ですよ」

多分

「香月さんお願いが有ります？」

「何ですか？」

俺が後ろを振り向いたとき

「料理を教えてください。」

え・・・料理を教えてください？

「ちょっと待ってください？」

俺が言う事を無視して話を進める

優香副会長

「香月さん他に何が作れますか？」

「ハンバーグ、カレー、肉じゃが、フルコースまで行けます。」

実は俺料理が好きで

色々勉強したら何時の間にかフルコースまで作れるようになった。

「凄いいじゃないですかそれ！！」

目が光ってる

「料理教えてくださいね

じゃ無いとさっきの事皆にばらしますよ。」

グハア！！

まさか・・・優香さんの裏がこれか

「分かりました。」「わーいありがと香月さん」

「い・・え」

怖い

この人に弱み握られたら
人生が終わる

「おはー香月ちゃん」

「おはようございます。瑞希さん
寝ぐせが凄い

「おはよう香月」

「おう。絆飯出来てるぞ
早い

「いただきます。」

瑞希会長と絆の席に着く速さが見えなかった。

「おはよう香月」

つづいて香奈出が起きて来た。
寝ぐせがない

面白くないな香奈出

それじゃ飯食うか

「いただきます。」

「美味しいよこれ」「確かに」

「誰が作ったの？」

「俺ですけど」

何で皆有りえないと結う
表情をするんだ。

「そうなんだ」
何で棒読みの皆

「そうなんですよ香月さんが作ったんです。」
ナイスです優香先輩
「ほんとに美味しい」
香奈出見たいに正直に言え

食事を終え

学校に行く準備をする

「お腹一杯」

でも学校始まるまで後30分は有るな
何しよ

洗濯ものでもほすか

「それじゃ俺洗濯物回してくるんで」

「待つて香月ちゃん」

急に瑞希会長に呼び止められた。

「何です？」

まさか・・な

「はい。わたしの洗濯もの」

「瑞希さん何を言っているのか分かりませんか？」

私の洗濯物？

「だから私たち夏休みが終わるまで此処に入るからね。」

何だその可愛いでしよ的なそぶりは

「あのー瑞希さん今夏休みが終わるまで入るって言いませんでしたか？」

「うん。」

えーーーーー

俺のゲームの時間が

いや何としても追い出す。

「俺実は変態何です。！」

「ははは同だ嫌ったか」

「ふゝんそうなんだ。」

中々遣るな瑞希会長だが俺に不可能は無い。

瑞希会長ごめんなさい。

俺は心の中でそれを言っつて瑞希会長のスカートをめくった。

水玉のパンツで有った。

「俺は変態何です俺の近くに入るともつとしちゃいますよ。」
これでさすがに

「香月ちゃん私のパンツ見たかったの」

いいえ見たくありませんよ

本当の目的は貴方を此の家から追い出す為の策だ。

「ええ。まあ」

「香月そうなの」

香奈出言つて来た。

「ああ。俺は此処に入る女子のパンツが淒く見たい」
大声で叫んでしまった。

これで俺は初心証明の変態に成ってしまった。

「見たい時は言ってくれば好いのに」

え・・・

「そつよ私も見せてあげたのに」

は・・・

「香月さん見たい時は言ってください。」

一体何が有ったんだーーーーー！！！！

これは幻・幻だ。

俺は目を閉じもう一度目を開けると

やはり幻ではない。

何故皆スカート持ってこっちに来るんだ？
誰か誰か入らないのか？

そうだ絆は？

辺りを見渡したが入らない
逃げたなアイツ裏切り者――

「香月ちゃんの変態って黙っててあげるから」香月さん「香月」
来るな来るな

俺はリビングを出て自分の部屋に行き
鍵を閉めた。

取りあいず制服に着替えよう

ドンドン

「開けてよ香月ちゃん」香月「香月さん」
くそ

逃げ道は窓

何で鉄格子が有るんだ？

保険を掛けておくか

ピピピ

バン！

扉が破られた。

「ほらー香月ちゃん」

「見せないでください。」

何で俺がこんな眼に

「見たかったんでしょ」

仕方ない

さらに変態に成ってしまうが
仕方ないよな俺

「俺ブレザーを脱いでくれないと燃えないな」
俺がそう言つと皆脱ぎ始めた。

「待て待てー脱ぐなー」

「何でよ香月がブレザー脱いでつて言つたんじゃない」

いやー普通誰かは冗談でしょで済むはずなのに何でー^{ピン}ポーン

ナイスタイミング

「はーい。退いてください」

「あ・うん。」

皆残念な顔するんだ？

「氷神先輩遅かったな」

あれ

「お届けものです。サインお願いします。」

「あ・はい。」

それは俺がこの前ショピングで頼んだ。ゲームだった。

あれ氷神は？

携帯を見ると

相手にメールが届きません。

何で・・・

「香月助けを求めてもだめよ。」

く・個の声は香奈出

「何をした。？」

一体何をすればメールが届かなくなるんだ。

「これ何ーんだ。」

小さい機会を出してきた。

「まさかそれで俺の携帯を妨害したのか？」「ピンポーン正解」

そんな機会何処にも無いはずだ。

「此のまま学校に行けば」

カチャ

え・・嘘マジで

俺の背後に入たのは優香さんで有りました。

「香月さん私の事好きですか？」

超級で来ましたか？

どうする？

1好きです 2襲う振りをして逃げる 3今すぐ俺から離れないと
もう泊めませんよ。

1と2は有りえない

「今すぐ俺から離れないともう泊めませんよ」
言うと

皆直ぐに離れてくれた。

そろそろ学校に行くか

「学校に行きますよ。瑞希会長、優香副会長、香奈出」
「「「はい。」」」

絆学校で待つてろてめーを生贄にしてやる

俺は学校に行った後絆を女子便所に閉じ込めた。

今日は何にしようかな晩飯

またお泊り会（後書き）

感想できればお願いします。
次回 本当にごめんなさい

本当にごめんなさい（前書き）

すこし編集しました。

本当にごめんなさい

「ふぁゝ眠たい。」

何で優香副会長が俺の隣で寝ているんだ。

・・・

「うわああああ」「何です。もう朝ですか？」

しかも上ブラだけだし

目のやり場に困る

「てか、優香さん何で此処に入るんですか？」

確か昨日は普通にベットで寝て。

そう俺は此処までしか知らない

「昨日香月さんが寝た後此方にきて一緒に寝たんです。」

ハッキリと言わないでください。

「取りあいず上を来てください。！！」

疲れる

「見ました。？」

めっちゃ可愛い

三秒間無言が続いた。

「いえ、見てません。」

「そうですか？勝負下着何ですけど」

普通niiそんな事言っちゃてるよ

しかも本当に残念そうにしている。

朝飯を作りに俺は降りた。

今日は、野菜炒めか？

よし、やるか

「香月さん私も手伝います。」

来たー

恐ろしい裏を持っている我が学校の副会長

「分かりました。食材を切ってください。」

気まずい

これが逆境と言う奴か

「具切れました。」

これで炒めて混ぜて

野菜炒め終了。

えーと今は7:00かよし皆を起こしに行こう

「じゃ俺皆起こしてきますね?」「は・い。」

何か言いたそうだな

でもそれを聞いたら戻れなくなる気がする

階段を上がり自分の部屋に行き一人ずつ起こした。

「瑞希さん起きてください。」

「香月ちゃんキスして〜」

何て寝言だ。

恐ろしい

「起きろ香奈出」

「私の為に頑張きなさい香月」

こっちも恐ろしい

「絆起きろ」「あと5分」

俺は絆にエルボを喰らわせた。

「ガハア痛いだろうが。」

お前がとつと起きないから悪いんだろ

「早く下行って飯食え」

「おう。」

さっさで行ってしまった。

残った二人を

大声で

「起きろ二人ともー」
すると

「おはよう香月ちゃん」香月」

つてお前らもかー

此の二人も上を来て無いのだ。

「上を来てください!!」

くそ何で俺がこんな眼に

「香月ちゃん」抱っこして連れて行って」

瑞希会長が飛びついて来た。

「胸が当たってます。」

「香月ちゃん顔赤いよ。」

どうする

1じゃ下で待ってます。

2張り倒す

3そのまま連れていく

2、3は有りえない

「じゃ下で待ってます。」

「うん。」

何で残念な顔をするんだ？

その事を考えながら下に行った。

食卓に皆が集まり朝飯を食べて入た。

「カヅキ昨日お前のせいで俺皆に変態とか言われたんだぞ
それは君が悪いんでしょ

俺を置いて学校に行く君が悪い

「自業自得だ。」

「俺が何かしたか？」

逃げただろ

「取りあいず食べ食わないならかたずけるぞ？」

「食うから待ってくれ。」

慌てて一気に食べ始めた。絆

今日はどうしよう？

土曜だし

んゝ DVDでも見るか？

「カヅキ何処に行くんだ？」

「DVDを見に行くんだ。」

「俺も行く」同じく

全員が行くと言い出した。

俺一人で見たかったに

「分かったよ。」

皆を連れて奥の部屋に行った。

ガチャ

「広いなーカヅキ」

ハシヤグナお前はガキか？

「こんな部屋合ったんだ。」

「ええ。まあ」

何見るんだろ？

聞くか

「何見ます？」

「怖い」「ゾンビ」「ホラー」

お前らは本当に女の子か？

絆が震えてる

「絆もしかして怖いのが駄目なのか？」

「い・・・や別に平気・・・だ。」

震えながら言われても説得力無いぞ絆

DVDを見だした。

ちなみに見ているのはバイオである。

2時間ある

俺は後ろの方に有るソファーで見ている

他の皆は前に座って見ている

うわー

マジで絆が震えてる

「絆毛布入るか？」

「ああ。」

何て臆病な奴だ。

「はい。ジュースです。」

夢中になってる

あゝ言い忘れた。

個々にも台所が有るんだ。

「香月さんも一緒に前の方で見ませんか？」
優香さん優しい人

「いえ、俺は此処でいいです。」

「じゃ隣良いですか？」

何で前に戻らないの？

「はい。どうぞ」

そろそろ菓子でもようつりするか？

自分の席を立て台所に向かって菓子をようついして瑞希さんの所に
持ってた。

「ありがとう。」

あ・・礼がやつと来たか
遅い

ゲームしに上に行くかそろそろ

「それじゃ皆さん見て入てください。終わったら新しいDVD入れ
てみてください」

「何処に行くの？」「」「」

嘘の達人をなめるなよ

「上に行って勉強するんです」

「ああ。」「」「」

俺は天才だ。

「香月さん私も付き合います。」

どうする？

これだ！！

「いえ俺一人で大丈夫です。それでは」
ガチャ バタン

これでゲームができる。

階段を上り父さんの部屋へゲーム部屋に

ディスクを入れ

ヘッドホンをしてゲームスタート。

へーすげー！

歯食い縛れ天浪滅牙ー

面白いなこれ買つてよかった。

「香月さんこっちに入ますか？」ちゃん

ガチャ

無論ヘッドホンをしている為聞えない

俺は嫌な予感がしたので後ろを見ると

そこにはニツコリと笑った優香さんと瑞希さんが立っていた。
怖い怖い誰か

俺は再びゲームを再開した。

ヘッドホンを取られた。

「香月ちゃん」さん何で自分だけゲームしてるの」

ヘッドホンを取り貸してまたゲームを遣り始めた。

優香さんが小声で「あの時の事ばらしますよ」

まけた

「どうもすいませんでした。」

「香月さん瑞希はねティルス大好きなの」

まじか

「だから遣らして？」

優香さん怖い

「は……い。どうぞ」

「楽しいね香月ちゃん」

楽しく無い

この人ありえない

コンボの数とか秘奥義めちゃくちゃしてるよ。

止めて俺の今までの結晶が

そのひ俺のデータは、瑞希会長の手によってクリアされた。

しかも俺のゲームは選良された。

本当にごめんなさい（後書き）

次回 テスト

変えてみたので感想お願いします
前のとどちらが良いか感想を聞かせてください

テスト（前書き）

前のシナリオを変えたので見てください。

テスト

今日は中間テストの日

昨日は散々な眼に合ったな

ゲームは選良され俺はゲームが出来なくなった。

ハアー

「何ため息着いてんだ？」

お前には分かん

「それより今日の朝飯は？」

テストだから

「かつ丼だ。」

「えー朝からかつ丼かよ」

「嫌なら食べなくてもいい」

「どうもすいませんでした。香月様」

許してやろう

だがお前のだけは、辛子たっぷりだぞ絆

「おはようございます。」

個の声は昨日俺を脅した優香さん

「おは」

今度は瑞希さんだ。

「あゝ香月さん朝ご飯は一緒に作りましょうって言ったじゃないですか。」

謝らないとまた

「すみません。」「今日は許して上げます。」

ありがとうございます。

この頃謝ってばっかしだな俺

「おはよう香月」

個の声は香奈出だ。

「おはよう香奈出飯出来てるから食え」

皆が机に座りへいただきます。ㇿ

朝飯を食べ始めた。

俺はその間に作戦を考えていた。

どうやって俺一人でゲームするか？

確か昭子さん帰って来てたはず一日泊まらせて貰おう

「じゃ俺着替えてくるから」

「はい」おう「」

階段を上がり着替えながら

ピピピ プルルㇿ

「もしもし昭子さん？」

「どちら様ですか？」

うわあああ

個の声久しぶり

「俺です香月です。」

「え・・香月君久しぶりどうしたの？」

家に変な奴が入るから泊めて暮れは駄目だ

「えゝと一日泊まらせて貰えませんか？」

「え・・私の家に？」

「はい。」待って」

へお母さん香月君が泊めてくれないかだってㇿ

凄い聞える

「母さんが良いよだって」

「ありがとうございます。」

本当にありがとうございます。

すげー何で俺感動してんだ。

「じゃ今日の帰りに行きます。家は前と変わって無いですよね？」

「うん。大丈夫だよ変わって無い。」

「それじゃまた夕方に」「うん。」

ふゝ

これで取りあいず平和で普通な所に行ける。

荷物よし

あとはテストだけ

学校についてテストが始まった。

「第一問 香月が好きそうな人は？」

何だこの問題誰が作った？

辺りを見渡したが皆普通にテストをしている

此のテストでおかしいと思うのは俺だけか！！

「第二問 香月がよく食べる食べ物は何？」

ふーざ「蹴るなーーーーー！！」

「香月君うるさいですよ。」

「この問題は、一体何だ！！？」

「え・・・テストですけど」

先生がこの調子じゃ駄目だなこのクラス

俺はダッシュでテストの紙を回収して行った。

30分後

疲れた〜

「香月此の紙どうするんだ？」

「無論燃やす」

「一体誰がこんなテストを作ったんだ？」

「私だけだ」

そこには超お金持ちの香奈出が立っていた。

お前か！！

「香奈出ちよつと来てくれないか？」

「うん。」

香月キレたな

コイツをあ教室に閉じ込めてやる

「此処だ。入ってくれないか」「う・ん。」

香月とうとう私に告白するんだ。

カチャ

「え・・・」

私が振り向くと扉は、閉じて入た。

ガチャガチャガチャ

鍵が閉まってる

「香月出して？」

「無理じゃ」「え出してよ？」

「あとその部屋幽霊出るから」

タタタ

そこには香月の姿も無く

足音だけが聞えた。

ダンダン

「出して出して」

うわああああ

気味悪い個々変な声も聞こえる

「誰か出して？」

俺は皆の所に戻った。

「香月、あれ香奈出さんは？」

「閉じ込めて来た。」

酷いな香月

流石にキレると何するか分からないだけある

可哀そうに香奈出さん

テスト二つ目

数学

第一問 香月が付き合った人数は？

「先生ちよつとトイレに行つて良いですか？」

「行つてきなさい。」

香奈出さん今度は何処に閉じ込められるんだろう
ガンバ香奈出さん

カチャ

鍵を開け香奈出を出した。

「ありがとう香月」「ちよっと着いてこいよ。」

何処に行くんだろう

「うん。」

俺は香奈出と上の階に上がりある教室に再び閉じ込めた。

カチャ

「じゃ香奈出」

「香月出してよ。」

「いやだ。」

香奈出明日のテストがこんなだったらお前を男児トイレに閉じ込めてやる

そのばを離れて教室に戻った。

キンーコンーカンーコン

「今日のふざけたテスト終了。」

よし帰るか急いで

「絆香奈出は上の階の1000号室にいる。じゃ」

俺かよ

「分かった。」

全速力で走って家に帰り荷物を取り
昭子さんの家に向かった。

え〜と此処だ。

ピンーポンー

「はーい。どちら様ですか？」

「香月です。」

香月君来るの早いなー

まあ良いかその分一緒に入られるし

カチャ

「入って」「お邪魔します。」

家に入りリビングに行った。

凄いピカピカだ。

埃が無いテレビ見もでかい良いなー

「香月君座って」「はい。」

しかも昭子さん前より綺麗に成った。

「あれ・・昭子さんのお母さんは？」

「旅行に行ったよ。」

これはチャンス

「どうぞお茶」「ありがとうございます。」

ゴクゴク

美味しい今日はふざけた一日だったけど
でも、これは最高

あ・・そうだ。

香奈出に電話し無いと行けないな

「ちょっと電話してきますね?」「はい。」
香月君前より男前が上がったな〜

嬉しいな。香月君が泊まって暮れて

ピピピ

プルル プルル

「あ・もしもし香月だけど」

「香月どうしたの？」

「今日友達の家泊まるからじゃ」

ブチ

「え・・・香月！」

切れちゃった。

「すいません昭子さん」

「香月君いい加減昭子って呼んで」

何でまあ良いけど

「分かりました。」

これで一歩全身かな

何で嬉しそうな顔してるんだろう？

「それじゃお風呂沸かしてくるね」

「はい。」

それにしても綺麗な家だ。

ふ。やっと落ち着ける

「香月君お風呂入っても良いよ。」

「分かりました。」

本当に綺麗に成ったな。昭子さん

「お風呂上がったならご飯にしょ」

「はい。」

俺はリビングを出てお風呂場に向かった。

何じゃこりゃ

風呂が出かいのだ。

うわゝ

あと二人くらいは入れそうだ。

ジャー

気持ちいい最高

俺は体を洗おうとした時

ガラガラゝ

え・・・

「何してんですか？ 昭子さん」

「お背中流します。」

流さなくても良いですよー

ご一緒に誰かー

結局

ザーザーザー

ジャーア

「これでよし香月君もう良いよ」

あれ何で前かがみなの？

「香月君どうして前かがみなの」

「え・・・あ・・・それはその」

言えない

「私晩御飯の私宅あるから行くね。」

「はい。」

ガラガラゝ

やっと出て入って暮れた。

「あ・そうだ香月君」

ガラガラ>

え・・・

「キャーーーーー！！！」

俺が言いたいーーーーー

風呂を上がった。

散々な眼に合った。

もう嫌だ。

「ごめんなさい。」

「謝らないでください。」

「お詫びに晩御飯出来たから食べて」

中々遣るように成ったな昭子さん

「いただきます。」

パク

美味しい何だ此の美味さ
負けた。

「美味しいです。」

「ほんと好かった。」

嬉しそう

晩御飯を食べ終わり二階へ

「香月君は此处で寝て」

「はい。」

でも、何で昭子さんの部屋？

まあいいか

「お休みなさい昭子さん」

「うん。お休み」

香月君また会えてよかった。

幸せ

早く寝て明日の朝ご飯作らなきゃ

明日はどうか平和な一日が過ごせますように

過ごせなかったら絆をまた女子便に閉じ込めよう

テスト（後書き）

感想できるだけください。

総合評価も貰えとうれしいです。
頑張ります。

次回 誰の家に泊ってたの？

誰の家に泊まってたの？（前書き）

すいません。

思いつかなくて俺が実際に遭った事を書いてみました。

誰の家に泊まってたの？

ピピピピ

うゝん

え・・・これは一体どうなっている？

昭子さんが俺の隣で寝ているのだ。

「昭子さん起きてください」

もう何で俺ばかりこんな目に

「うゝんおひゃよう香月君」

何で？上着て無いのもしかし流行・流行なのか？

そんな事どうでもいい

「早く上を来てください。」

何で俺が恥ずかしがらなきゃいけないんだ。

ほんと俺の周りの女子は、こんな奴ばっか

そんな事を考えてると

そう昭子さんが「きゃーーーー！！！！！！」

と言う叫びをあげ上を来た。

俺のせいなのか？

「香月君見た。」

香月君に見られたかな？

「いえ見て入ません」

本当は見ました。凄く大きかった。

すばらしい。何でモデルに為らないんだろ？

「もういいよ。私下に行つて朝ご飯作るから」

「はい。」

やつと着替えれる

俺は制服に着替え一階へ

そこには「凄いですね」

「そう。ありがとう」

美味しそうに出来ている

焼き加減素晴らしい

「言い御嫁さんに成りますよきつと」

「ありがとう」

何故顔を赤くする？

まいい

「いただきます。」

パク

うん。美味しい

「美味しいです。」

好かったー

「いただきます。」

朝ご飯を食べ終わりお片付けをしている時

「香月君」「はい。何でしょう?」

何だろもぞもぞして

「今付き合っている人とか居るの?」

何故?

「いえ入ません。」

「そうなんだ。」

そんな話が20分続いた。

「それじゃそろそろ学校に行きますね」

もう行っちゃうんだ。

「うん。」

俺は靴をはき玄関に手を伸ばした時

「香月君今日は泊まるの?」

出来ればそうしたいけど

「すいません。また泊まらせて欲しい時に連絡します。」

多分直ぐ連絡する事になると思うけど

「うん。」

凄く嬉しそうに微笑んでる

「行ってきます。」

「行つてらしゃい」

俺は昭子さんの家を出て学校に行った。

学校に到着して教室へ

「おはよう絆」

「よう。お前昨日何処に行つてたんだよ?」

言えないよ

だつて言つたら殺されるから会長&副会長&香奈出に

「友達が山口に引つ越したつて言うから山口に行つてた。」

完璧だ。

「そうか」

「香月昨日誰の家に泊まったの?」

来たー

「だから友達の家」

「そう。」

香奈出が急に俺に近ずいてきた。

何で匂いを嗅いでいるの？

大丈夫みたいね

香奈出離れた。

何の為に？

そんな事を考えて入ると

キンーコンーカンーコンー

「皆座れテストを行う」

皆が席に座りテストの紙が配られた。

「テスト始め。」

俺は紙を表向きにしテストを始めた。

第一問 香月が生まれたのは何年

「先生香奈出を借りていいですか」

「さつさで行って来い」

香奈出さん

今日は幼者しないよ

俺は香奈出を連れて男子トイレに向かった。

「香月個々男子トイレ」

分かってる

君をこれから閉じ込めるんだ。

「いいから来い」

香月まさかとうとう私にあんな事やこんな事を

「分かった。」

「香奈出此処だ。入って暮れ」

「うん。」

俺はブレザーの中に隠していたロープを取り出し
香奈出ぐるぐる巻きにして放置した。

「香月助けて」

無理

だって君はテストが終わるまでそのままでいなさい

「じゃ・後男子に襲われるなよ。」

「香月ーーーー」

聞えない

俺はトイレを後にして教室に戻った。

「香月・・・香奈出さんは？」

「閉じ込めた。今日は男子トイレにな」

うわああ

この人とうとう遣っちゃったよ

後で香奈出さんをレスキューしないとな

キンーコンー

ふざけたテストは終わり俺は家に帰った。

帰り道の途中新しいティルズが発売去れているのを見かけ買った。
えゝとグレイセスFか面白そうだな

ランラン気分で家に帰った。

「ただいまー」

って誰も入らないか

「お帰りのさい香月さん」

何で入るの優香さん？

「今日の夕食は私が作ります。」

「うん。」

それはありがたい

「香月さんその手に持っているのは何ですか？」

ゲームといったまた取られる

こうなったら

「エロ本です。」

何で怒らないの？

「男の子だしね」

それで良いのか副会長

俺は上にかかるうとした瞬間

「香月さん此の髪の毛誰のですか？」

え・・昭子さんの髪の毛である

何であるの？

「昨日泊まった家って女の人の家ですか？」

まずいこれはまずい

こうなったらスーパー演技力を見せてやる

「優香さん俺を信じれないんですか？」

香月さん力が強い

「・・・信じます。」

勝った。

はは俺は無敵だ。

俺は二階に上がり普段着に着替えた。

コンコン

「香月さん」

優香さん何だろ？

「はい。落し物です。」

そこには怒りマークが見えた。

「昭子さんの家に泊まってたんですか？」

「げ・・何で

「携帯が」

終わった。

その日俺の体はあり得ないくらい痛めつけられた。

誰の家に泊まっていたの？（後書き）

次回 あるかも
感想くださいね

今日は最高（前書き）

楽しんでみてください。

今日は最高

何時も道理の日常

な訳が有るか――――！！！！

何故俺は今隣で寝ている人を追い出せないか皆さん説明しよう。

そう昨日は優香さんが俺の布団で寝てキスしようとして俺は逃げた。

その後だ。優香さんにこう言われた。

「明日も私香月さんの隣で寝ますと」

何だと俺は思った。答えがこれだ

「私にキスしてくれなかったから後私の胸触った事皆に言うよ。」
笑顔で来た。これは怖かった。

そしてこれが朝目覚め――

俺の隣には優香さん何故入るのか誰か教えてくれ。

昨日鍵をがちり閉めたのに優香さんが俺の隣で寝ている。

ま
さ
か
な

扉を見てみると鍵は……「壊されてる」

そんなバカな

「んっ、おはよう香月さん」

優香さんが目を覚ました。

「優香さん一体どうやっては入りました？」

「普通にです。」

鍵が全て壊されているのに普通？

そうかこれは夢だ。また寝れば全て元道理になる。はず・

「そうですか。取りあいず俺朝飯作ってきます。」

「待って私も行きます。」

来ないで――

結局俺の隣には優香さんが入た。

「今日の朝ご飯は何にします優香さん？」

「パンとかはどうですか？」

パンか――

「良いですね。たまには」

冷蔵庫から食材を出して作り始めた。

「優香さん」

「はい。何ですか？」

「ハムをさらに入れてください。」

「分かりました。」

これで安全

10分後

「完成。」

そろそろ皆を起こしに行くか？

俺が階段に向かおうとしたそのとき

「香月さんちよつと良いですか？」

来た――

誰か――誰か――

「は・・・い。」

「DVDを見る部屋に行きませんか？」

何故――？

凄く嫌な予感がある

そんな事を考えながら向かう

ガチャ バタン

扉を開け中に入ると

ガチャ

え……

「優香さん何で鍵を閉めるんですか？」

怖いよ——誰か——

「香月さん今日こそしてもらいます。」

「何をですか？」

怖いけど質問してみた。

「キスです。」

「……………」

ここから逃げたい。

多分学校に入る奴らは喜んでするかも知れないけど俺は違うんだ。

「多分」

何で俺がキスしないかって、優香さんにキスをすると香奈出と瑞希さんに何されるか分からないからだ。

そんな話を話していると端に追い込まれた。

後ろには可部、右を見ても可部、何故窓が無い？

誰だこんな家を設計した奴は出てこい。

優香さんの唇が後5センチ、ヤバイもう駄目か？

その時

ガチャガチャ

誰か来た——

「誰か入るの？」

その声は香奈出——

神様ありがとう。俺は神を信じるぞ

「あ——俺だ。香奈出」

「え……香月？」

何で香月がDVDの部屋へ入るのもしかして隠し撮りしてるのバレタ。

何でこんな時に香奈出さんが来るんのそんな事は関係ない。
今なら遣れるのよ私

俺が香奈出と話している時俺を優香さんが押し倒した。
ボン！！

「どうしたの香月？」

優香さんまた大胆な事をどうやって逃げる？
考える。

「悪魔の考え」もう遣っちまえよ。

「天使の考え」そうです。もう遣ってしまいなさい。

何で天使と悪魔の考えが何で一緒なんだ。おかしいだろ

そんな時墮天使がまた遣って来た。

待ってました。今度も良い考えを暮れ

「墮天使の考え」キスをしなさい。誰も見て入ないのでですから

あれーー今度は墮天使までーーー

だが墮天使の言う事も一利あるな。

今なら誰も見て入らない。これなら優香さんとキスしてもばれない。

覚悟を決める。デモンズ・ランス

しまったーーーついついティルズの技を心の中で言ってしまった。

よし。遣るぞ

「優香さん立ってください。」

香月さん遣る気になって暮れたんだ。

「はい。」

俺は優香さんに顔を近づける。その時

「香月ーーー何をしてるか答えるーーー」

ドアが吹っ飛んだーーー！

しかも香奈出が吹っ飛ばしたーーー！

「うわぁー」バタ

「・・・」

「香月何をしてるの？」

そう俺が優香さんの押し倒している状態だ。

「いや。これは事故だ。」

「いやん。香月さん強引なんだから」

「優香さん何を言ってるんですか？」

俺の背後から魔が魔がしいエネルギーが感じられる。

怖い怖い

「そうですか香月分かりました。これから香月を全力で排除します。」

「

何だー今の言葉

俺の目の前では金属バッドを構えた香奈出がいた。

「落ち着け香奈出話せばわかる。」

「香月死ねー」

貴様の行動パターンは既に分かっている。

右から一発殴り。二回目はバッドで殴る

俺は何とか交わした。早い。シュ

「うわぁー」

え・・・バッドだね。

俺の来ていた服が切れた。マジかー

こうなったらあれを遣るしかない。

「香奈出ー」

俺は叫び香奈出押し倒した。

「香・・・月」

こっからどうする？

ドラマと同じことをして見るか？

「俺の事信じてくれないのか？」

「信じて入るよ。でも押倒してたし」

「それはお前が扉を吹っ飛ばしてびっくりして転んだんだ。」
「分かった。」

ふっ

何とかノリ切った。

やはり俺のとうりに進んでいるな

「よし朝飯食べようぜ」

「うん。」はい。」

うわあああ何て良い笑顔

そして皆で集まり朝飯を食べた。

「なあ香月？」

「何だ絆？」

「明日買い物いかねーか？」

何故買い物

まあ、でも食材も切れかかってたし良いかもな

「良いぜ。」

「私も行く。」{皆}

皆かよ。

楽しい買い物も悪くわないな

よし。明日に備えてゲームしよ。

朝食を取り終わり

「瑞希さんと優香さんと香奈出と絆は、学校の部活をしに出て行った。」

何故俺が部活に行かないかだって

それは、入学式の時に生徒会に無理やり入らせられ部活をしようと言
う事で俺は全ての部活をして退部した。

だから今日は俺一人ー

階段を上がりゲーム部屋へ

ゲームスタート。

「天覇神雷断」

凄いなアクセルモード強い。

俺はそれからゲームにほとんどの時間を使い。夕方

今日の晩御飯はシチューー

「ただいまー」
「皆」

皆も帰って来た見たい

「飯出来てるぞ」

「はい。」
「うん。」
「分かったよー」
「ありがとうございます。」

「

それから皆で夜飯を取り順番に風呂に入り

それから布団に入ろうとした時

「香月お休み。」

「おう。」

何で俺の布団膨らんでんだ？

恐る恐る布団をめくるとそこには優香さんがいた。

「きゃ」

何だ此の可愛い声は

「襲いますよ。」

「いいですよ。香月さんなら」

「冗談です。早く出て入ってください。」

「香月さんのケチ」

ケチですとーこれからは部屋の鍵を頑丈に似て遣る。

優香さんが出た後

自分の部屋の扉に鍵を取りつけた。
前より強力だ。

よし。寝るか

安心して俺は深い眠りに就いた。

今日は最高（後書き）

次回は買い物です。
出来るだけ感想をください。

買い物（前書き）

見てください

買い物

いつもの朝隣には何故か優香さんがいる

おかしいな昨日確かに部屋に鍵をがちり閉めた筈なのに

まさか・・・まさかな・・・

恐る恐るドアを見ると

これは凄い鍵が全て壊されている。嘘でしょーーーーー！！

優香さんを起こさないように起きないとまた何するか分からない。

ゆっくり布団から出た。

顔を洗い食事の準備中

今日は・・・食材が無い？何で？

残っていたはずなのにまあ良いか。

パンにしよう。そして皆が起きて来た。

ガチャ

「おはよう香月ちゃん後キスして」

「寝言は寝てから言ってください。」

階段の方から音が次は誰だ？

ガチャ

「おはよう香月さん何で私を起こして呉れなかったんですか？」

あたり前でしょ。貴方を起こしたらキスしてから始まり最終的に脅

すでしょ。

「すいません。」

ガチャ

「おはよう香月」

香奈出が起きて来た。

珍しいな皆が俺に起こされる前に起きた。

「おはよう香月」

来たか我が下僕絆よ

「いいから早く食え。」

「何でパンだけ？」^ハ皆^ハ

「すまん。買い出し行くの忘れてた。今日行く」

そこで

「皆で行くんでしょ」行くんだろ^ハ皆^ハ

お前らはシンクロしているのか？

「いただきます。」^ハ皆^ハ

「なあ絆」

「何だ香月？」

「久しぶりに遊戯王しーね」

「いいね」遣ろうぜ。」

俺達は階段を上がり自分のデッキを持って一階に下りた。

「よし。遣るぞ」

「おう。」

「デュエルスタート」^ハ香月と絆^ハ

「先行は俺が貰う。」

まずは俺のターン

「ドロー」

これは次のターンで終わりだな

「俺はカードを二枚伏せてターンエンド。」

「今度は俺かドロー」

絆のターン

香月の遣ろう事故ったのか
だが攻める。

「E・HEROエアーマンを召喚」

くっエアーマンまさかヒーローデッキか

「エアーマンの召喚じデッキからヒーローをサーチすることが出来

る。デッキからオーションを手札に」

香月お前は此のターンで死ぬ

「マジックカード融合を1枚とミラクル・フュージョン発動。」
まさか

「E・HEROジ・アースとシャイニングを特殊召喚。

シャイニングの能力発動ゲームから除外されているヒーロー一枚に着き攻撃力300ポイントアップ」

ゲームから除外されているヒーローは2枚600アップかくそ

「アースの効果発動シャイニングをリリースしてシャイニングの攻撃力分アップ。」

香月これでお前は致命傷だ

「アースとエアーマンでダイレクト・アタック」

甘いな絆

「リバースカードオープンサンダーブレイク。」

何ーーーーー！！

「手札を一枚捨ててフィールドにあるカードを一枚破壊する。」

「アースを破壊。さらにもう一枚サンダーブレイク発動」

そんなーーーーー！！俺の作戦が

「ターンエンド。」

「俺のターンドロッチュナーモンスタージャンクシンクロン召喚。」

香月お前事故つてた訳じゃないんだな

「墓地からサポータを特殊召喚。それに機械複製術でサポータを二体デッキから特殊召喚。」

これで俺のコンボは完成し絆に9000オーバーのダメージを与え俺の落城勝ちだった。

「香月ちゃん何してるの？」

「遊戯王です。」

こんな事言っても知らない筈だよ

俺もそう思っていた。だが

「私とも戦おうよ。」

「……………遊戯王知ってるんですか？」

まさかな…………

「うん。私デッキ持ってるもん。」

そんなバカなあり得ない。

試してみるか

「じゃ俺とデュエルしませんか？」

「いいよ。」

そう言ううち瑞希さんは上の階にデッキを取りに行った。
まさか本当に持っていたんだ。

「デュエル。」香月と瑞希

「先行どうぞ瑞希さん」

俺が負けるはずが無い。

余裕だぜ。こんな事を思っていると

「行くよ〜ドロ〜」

何が来る？

「香月ちゃん」

「何ですか？」

「個のデッキって香月ちゃんがシャッフルしたんだよね？」

「はい。そうですけど」

何か有るのか？

だが俺は負けないぜ。

瑞希さんがカード机の上に並べた。

あ……………れ何でカード机の上に置いてるんだろう

確認した。

何！！あり得ないまさかこんな事が
俺の目の前に有るのはエグゾディア

負けた。しかもデュエル始まって先行1ターンキル話を変えよう

「皆そろそろ買い物行こうか？」

あ・・香月話とデュエル止めた。何てせこい

「うん。」「おう。」「はい。」「

その後俺達は家から出てショッピングモールに着いた。

「それじゃ何を買うんだ。」「

「俺はゲーム」「私もゲーム」「私も」

「じゃ3人で買い物して来い。」「

「え~~~~~」

何だそのブーイングは貴様等

そろそろどっちが上か教えて遣ろうか？

「それで優香さんは何を？」

「私は食材と料理の本です。」「

まともだー

どっかの馬鹿とは違うな

「じゃ食材と本買ったら行くから」

「おう」またね

俺達は別行動を取る事にした。

俺は此の時優香さんの恐ろしさをする。

「じゃまずはスーパーから行きますか？」

「.....」

あれ返事が無い。

「優香さん？」

「はい！！何ですか」

びっくりしたー

「スーパーから行きますか？」

「待ってください。此处に入りましょう。」「

何でカラオケ・ボックス？

まあ時間は沢山あるしいいか

「いいですよ。」

ガチャ

何だ個々本当にカラオケ・ボックス？

何でベットが有るんだ？

辺りを見渡したが違うのはベットが有る事だ。

・・・まさか

カチャ

この音はまさかと後ろを振り向くと

優香さんが部屋に鍵をかけて入た。

嘘ーーーーー！！遣られた。

「香月さんこれで邪魔は入りません。」

「落ち着いてください。」

やばい優香さんがこっちに向かってくる。

頼む来ないでー

「今日こそキスしてもらいます。」

またかー！しつこいな！優香さん何でそんなにキスこだわるんだろう。

何か有るのかな？

「分かりました。その代り優香さんは俺の言う事を何でも聞いてくださいね。」

流石にこれでOKと言う奴は入ないだろ。

「はい。」

え・・・・・・作戦は失敗

優香さんがどんどん近付いてくる。

唇が後5センチでくっつく

え~~~~いもうめんどくさい。

俺はそのまま優香さんのほっぺにキスをした。

「香月さんやつとしてくれましたね」

だって俺のファーストキスは小学生の頃香奈出に取られている為キスは平気出来る。

すいませんごめなさい。嘘です。

「じゃカラオケ歌って行きますか？」

「はい。」

俺達はそのままカラオケで歌を歌った。

そのころ香奈出、瑞希さん、絆は

「ね〜ね〜絆っち此のゲームどう」

俺は瑞希先輩に渡されたゲームを見てみると

・・・R18って

「エロゲーじゃないですか!!」

俺の反応を見て楽しんで入るな瑞希先輩

香月お前が入ないと調子が出ない。

助けて香月

「絆君香月が欲しそうな物分かる？」

香奈出さんが急に変な質問をしてきた。

「どうしてそんな事聞くんですか？」

「香月にプレゼント上げようかなって」

「あ〜〜何だそう言う事ですか。ならノートパソコン欲しいって言うてました。」

「ありがとう。」

その言葉を言つと香奈出さんは携帯を取り出し誰かと喋っていた。

誰と喋ってるんだろう？

まあいいや

これとこれ買つか

俺達は買うものを買い集合場所に向かった。

そのころ

優香さん凄い

100点しか出していない。歌うますぎる

今すぐ誰かこの人を歌詞にして上げて

「優香さん上手いですね。」

「そうですか？」

何で顔赤くしてんだろう

今度は俺の番だ。

そのころ

香月の奴遅いへ三人へ

「電話してくださいよ。」

俺は2人に言う

「ごめん電池切れ」

何て役に立たない瑞希先輩

「分かったわ」

電話をかけるが

「出ない」

香月の遣ろう何処で何をしてるんだ？

そんな事を考えて入ると香奈出さんが携帯を取り出して何かしてる。

「香月発見。入こ絆君、先輩」

何だか分からないが着いて行って見よう

するとそこには

「此処かー！ー香月」

何と良いタイミングだ。香月が優香先輩を押倒してるではあゝりせんか

香月墓場行きおめでとう

「待てこれは違うんだ。」

誰か俺を助けてくれ

即座に香奈出と瑞希さんの攻撃を交わし絆のもとへ接近した。

「何で俺の所に来るんだ。」

後ろから瑞希さんのキックが飛んできた。

俺は、「絆すまん」

「え……」

バシーー

香月覚えてろーー バタ

すげー瑞希さんの攻撃

「俺の話を聞いてください。」

「知らないもん。」

えーならば接近して在れをすれば

俺はすぐさま瑞希さんと香奈出を押し倒した。

「信じてください。」

頼むこれで駄目なら死ぬ俺が

「わかったはその代り」

その代り何だ？

「香月ちゃんの隣で寝かせて」

凄く可愛い

でも、何で俺の隣で寝たがるんだ？

まあそれなら別に良いけど

「良いですよ。」

香月ちゃん今日で大人の階段上ってもらっよ。

何で瑞希さん笑ってんだろっ。

それより「何で此処が分かった。」

香奈出は携帯を俺に見せて来た。

「まさか・・・ナビ？」

頭を縦に振る香奈出

いつの間に！！

何とか解除せねば俺はハッキングの天才だ。

家に帰ったら即座に解除使用。

学校が有る日男子トイレに閉じ込めて遣る。

それから俺達は買い物済まし家に帰る。

「香月」

「何だ絆？」

もしかして築いた？

「ゲーム機貸してくれ」

「OKだぜ」

ふゝ怖い怖い

俺が絆にビビる日が来るとは

「香月さん」

今度は優香さんが声をかけて来た。

「何です優香さん？」

「私香月さんの奴隷です。命令してください。」

小さい声で俺の言ってきた。

そんな事したら俺が殺される。あそこに入る瑞希さんと超権力を持

つ香奈出に殺されるから

だから俺は命令しない。

「また後で優香さん」

だが俺は命令をしないぞ

「香月ちゃんまだ時間有るからゲームセンターによって行かない？」

ゲームセンターか久々に行くか

「いいですね。行きましょう。」

ゲームセンター到着

ふふふこれで俺の計画第9

俺の計画はこうだ。

皆がゲームで遊んでいる所を俺はトイレに行くといいゲームセンタ
ーから出て家に帰る。

完璧だ。

「香月」

香奈出が俺を呼んだ。

「何だ？」

「これ」

香奈出から何かを手渡された。

何だ？まさか爆弾そんなわけないか

「これ何？」

「香月の欲しがっていたパソコン」

何でこの人知ってんの？

まさか絆かアイツ何時か俺を裏切りな

「ありがとう香奈出。」

顔を赤くしてる。

何故？

まあいい作戦実行だ。

まず皆を5階連れて行く。

「皆上でコインゲームしないか？」

「OK」ハ皆

やはり俺は天才

皆と上に上がりゲームを始めた。ハ俺以外

「行けー」

瑞希さんうるさいな本当につるさい

お客様の迷惑になるでしょ。

だがこれも作戦の内

優香さん達は……
すげーコインが一杯有る。

まだ来て5分しか経ってないのにすごいな
取りあわず「トイレ行ってくる。」

「おう。」

さあ帰ろう

作戦道理に進み俺は家に着いた。

疲れた〜騙すのも疲れる

階段を上がりゲーム部屋に行った。

やつと続きが出来る。

スタート!!

「へえ〜ヤツパリ凄いな 그레이セスF」

「雷斬」ブチ

ああ俺のデータが!!

後ろを見「誰だ!!」と言うと

何故か優香さんが入た。

あれ確か優香さんも瑞希さんと同じ所に入たはず

俺の作戦がばれていたのか!?

「香月さん1人で帰るなんて酷いです。」

「すみません。」

何か言い訳を考える俺————!!

そうだ

「今日の晩飯何にしようかって今考えて入たんです。」

嘘だけど

「そうですか。私はテッキリゲームをしに帰って来たのかと
当たってる。」

中々遣るな優香さん

「俺これから下に行こうと思って」

「でも、香月さんがゲームしてた事瑞希に言わないと」
ガチャ

「ただいまー」 三人

何でこんな時に!?

優香さんが部屋から出ようとした時俺は咄嗟に優香さんの口を塞ぎ手と足をついつい持つてしまった。

取りあはずこれで動けないだろ

「香月さん」

「何ですか？」

「遣りたいんですか？」

何が？

今優香さんが言つてた事なんだろう？

「優香さん俺の命令聞くんですよね。」

こうなつたら遣るしかない

「はい。」

ついに香月さんの命令が

「今の事は誰にも言つては駄目です。」

「はい。」

「後マッサージしてください。」

これでカバーをしなれば

「分かりました。ご主人様」

「優香さんご主人様止めてください。香月でいいです。」

「はい。じゃ寝転がってください。」

優香さんの言うとうり寝転がった。

そのころ

「香月の遣ろう帰りやがつてー!」

「瑞希ちゃんも帰つてたね。」

俺達は香月と瑞希副会長を怒鳴りに上に上がった。

「何だ!？」

「そこそこ気持ちいよ優香さん」
「そうですか。なら個々は？」
「あ・・・気持ち最高です。」

あいつ等一体何してんだ！！

俺達はドアを開け香月に「お前ら何してん・・・だ！」香月ちゃん何してるの！」香月夕方から何してんのよ。」

あれ・・・マッサージ？「三人」

「何だお前ら帰ってたのか？」
取りあいずごまかす。

「ああ。」

何だマッサージか「三人」

「優香さんありがとう。」

「はい。香月さん」

あり得ない微笑みを浮かべられた。
可愛い過ぎる。

俺煩惱に負けるな！！

「今日は外でバーベキューしよう。」

「おう。」はい。「「皆」

それから皆でバーベキューの道具の準備をして

「それじゃカンパイ。」

何にカンパイしてんだろう？

まあいいか？

「美味しい。」

「御代りなら沢山有ります。」

「わ～～～い。」

皆楽しそうだな・何だ個の視線

その視線の先には香奈出が俺を睨んでみていた。
何で？

「どうした？」

「何も！？」

何で怒ってるんだ？

「俺何かしたか？」

「した！！」

え・何もしてないよな俺

「何か欲しい物でもあるのか有るなら買いに行くけど。」

「ホント何でも暮れるって」

あれ何か変わってるけどまあいいや

「うん。」

小さい声で

「香月と久々にキスがしたい。」

・・・

誰か俺に呪いでもかけたか？

「キスか小学5年生以来だな」

「そう・だね。」

「俺の部屋来い。」

メンドクサイから早く終わらそう

それから俺は自分の部屋に戻った。

物を取りに行くと言っ言い訳をして

「私トイレに行ってきます。」

「はい。」

香月さんも部屋に携帯取りに行くって言ってたけど何か裏がありそう。

そんな訳無いよね。

香月に言われたとつりに香月の部屋に行った。

コンコン

「はい。」

「私」

「は入れ」

ガチャ

「来たよ。」

「早く済ませよう。」

早く済ませてゲームしたい。

これが俺の作戦第14だ。

香奈出利用して遣る。

何も気にせず香奈出の唇と俺の唇が重なる。

これで・・・！！！！

俺の口の中に何かが！？

しかも俺は香奈出押し倒された。

「香月今まで会えなかった分キスする。」

え・・・それでもしかして7年分？

ヤバイ再び香奈出がキスをしてきた。

これはヤバイ俺の本能が襲えと言う。

駄目だ。違う事考えろ。

ゲーム何しようかな？

誰かが階段を上がり

コンコン

「香月さん入ます？」

何でこんな時に

「香奈出隠れる」

「うん。」

香奈出を机の裏に隠しドアを開けた。

「どうしたんですか？優香さん？」

「香奈で出さんが入らないから此処に入るかなと思って
当たってますよ~~~~~」

「じゃ下行きましようか？」

「はい。」

これで危機回避

それから晩飯を食い終わり寝た。

朝何故だろう。

俺の手の辺りに凄く柔らかい物が布団を上げ見みると
そこには瑞希さんが

何で入るの？

「香月ちゃんおはよう。」

「ぶーーーーう服を着てください。」

俺の目の前には全裸の瑞希さんが入る。

「めんどくさいから縫いじゃった。」

え~~~~~男と寝ているのに何て緊張感の無い人
だ。

「香月さん絆さんご飯ですよ。
~~~~~」

何でいつもまが悪い時に来るんだ。

「香月さんのお肉って美味しいですかね？ねえ香奈出さん」「そう  
ですね。」

顔が笑っているのに心が怖い。

俺の命も今日までか楽しかったよ、俺さようなら

その後俺は包丁で優香さんと香奈出体がバラバラに成るまで刺され  
大量出血で死んだ。

こんな事は起きないので皆さん。

「早く起きてください。じやないと私も香月さんの隣で寝ますよ。」  
「すいません。起きます。」

こんな感じでいつも道理に進んで行くので合った。

END

## 買い物（後書き）

勝手に終わらすな皆さんまだ続きます。

次回 夏休みの問題

## 夏休みの問題（前書き）

感想をお願いします。

## 夏休みの問題

そう毎回同じ状況から目が覚める。

俺の隣には優香さん誰か俺を助けて

一先ずゆっくりとベットから起きあがろう  
すると、

バシッ！！

何！？まさか起きた？

震えながら後ろを振り向く

「香月さん私を好きにして~~~~~」

何て寝言だ。そんな事したら殺される。

ともかく起きて朝飯を作り下に降りました。

今日の朝飯は何にしよう？

・・・！

小松菜の味噌汁と塩のお魚と適当だな  
調理に掛った。

料理する事10分

皆の朝飯が出来た。

ガチャ

「おはよう」

一番最初は絆が起きて来た。

「飯出来てるから早く食え。」

「おう。」

話をしていると皆が上から降りて来た。

「おはよう〜う。」

「おは!」

「おはようございます。」

皆元気だな!!

でも、そう優香さんから黒いオーラが見える。  
多分朝起こさず来たのが行けなかったんだろう。

取りあいず皆で朝飯を食べ片づけた。

「香月ちゃんお願いが有るの」

「私も」

「私もです」

「俺もだ。」

皆して何だ!?

「何?」

今は夏休みだとしたら

「」「」「宿題を・・・」「」「」

「嫌です。」

早！！！「皆」

「まだ何も言って無いだろ」

皆が首を縦に振る

「どうせ夏休みの宿題手伝えだろ！？」

「そつだ。」「皆」

ハッキリと言うな

しかも優香さんまで何で？

「皆残りの夏休み一週間だぞ」

「「「え・・・・・・・・・・・・・・・・」」「」」

一気に俺の前から姿を消した。「皆」

入なく成ったかと思えばまさかの優香さんが目の前にいた。

「手伝ってください。香月さん？」

俺高校1年生

高2の問題出来ません。多分

「分かりました。出来るだけ手伝います。」

20分〜

俺達が下で勉強していると上の階から絆が降りて来た。

「香月この問題どうやってとくんだ？」

めんどくさいな〜

「見せろ」

絆から紙を貰い答えを書いた。

「ほら出来た。もう手伝わない。」

「サンキュウ恩にきる。」

貴様の恩はいらん。

「香月さんここは？」

「個々はこう遣れば出来ます。」

「凄い香月さん頭良いんですね。」

仕方ないでしょ。

俺色々調べてたら色んな事出来るようになった。

「じゃ俺寝るんで」

「はい。ありがとう香月さん」

可愛い

上の階に上がり自分の部屋に入り作戦を考える。  
どうする？

此の家を出て何処かに住もうかな？

1人暮らしすれば少しは静かになる。

でも、夏休みさい終われば自由になる。  
耐える俺

そんな事を考えていると  
そうだ！

電話を出し昭子さんに電話をする。

ピピピ

プルル

「もしもし昭子さん？」

「そうですね、香月くん？」

「はい。お願いがあります。」

「もしかして愛の告白？」

「何？」

「昭子さんの家に泊めて貰えませんか？」

「何だ〜、家に泊めてか〜」

「でも、香月くんとまた入られるなら」

「いいよ。」

「ありがとうございます。」

「やった！」

これで夏休みが終わるまで昭子さんの家に泊めて貰えばOK。

俺は荷物をまとめ家からこっそり抜け出した。

後で香奈出に電話するか？

「もしもし香奈出？」

「どうしたの？」

「今日俺バイトだから帰らないじゃ」  
ブチ

「香・・・」  
切れちゃった。

「誰香奈出ちゃん？」

「香月が今日はバイトだから帰らないだつて。」

「怪しいな～～香月ちゃん」

香月さんまさか昭子って人の所に行ったの？

昭子家

ピンポンー

「は～～い。どちら様？」

「香月です。」

「今開けるね。」

これで夏休み楽にすごせると  
と考えていると

ガチャ

「入って」

俺が振り変えると

目の前にはバスタオル一つの昭子さんが立っていた。

「昭子さん服着てください。」

俺がそう言つと顔を赤くして自分の部屋に走つていった。  
可愛いな昭子さん

「お邪魔します。」

俺は昭子さんが上に上がつて着替えるまで下でお茶を飲んでいた。

それにしても綺麗な部屋

「お待たせ」

昭子さんがパジャマを着て降りて来た。

前見た時よりも胸が大きく成つてる。  
いやいやそんな事は考えては駄目だ。  
煩惱を捨てろ俺

「いえ、そんなに待つてません」

「ご飯食べて来た？」

「いえ、まだです。」

「じゃ食べる？」

「はい。」

昭子さん料理上手く成つてたしな

「どうぞ」

「いただきます。」

メニューは、スパゲッティだ。

もぐもぐ

「美味しいです。」

「そう。」

「はい。」

良かった〜香月くんが来ると思って張りきって作った会が有った。

何度も失敗したけど

「お腹一杯」

ご飯を食べて風呂に入り寝ようとした時

「私の部屋で一緒に寝ない？久しぶりに」

昭子さんと一緒に寝る？

俺の煩惱を止めれば何とかなるかも知れない  
だけど

「いえ、男女が一緒に寝るなんていけませんよ。」  
うわぁあ

俺自分で自分に嘘を着いてる

「良いです。」

「本当に良いんですか？襲いますよ。」

香月に襲われる？いいかも知れない

「良いですよ。」

[illegible]

心の奥底で俺は叫んだ。

だが俺は襲わない。健全な男だぞ俺

その後俺は何もせずに寝た。

だが暑い

目が覚めてしまった。

隣には昭子さんが気持ちよく寝ている。

ふ  
〜  
〜  
トイレに入こ

トイレを済まし再び寝ようとした時

! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! !

昭子さんが俺の方に転がってきた。

しかも唇が重なっている。

一体どう結ぶ状況！！！！

誰か教えて――

昭子さんを元の位置に戻し寝た。

あれ……俺何かしたっけ

いや、何もしていない事にする。

それではお休み。

その頃香月の家では

「夏休みの宿題が終わらないよ~~~~~」

瑞希会長が泣いている。

「一緒に頑張ろうね香奈ちゃん、絆ちゃん」

「はい。」

俺の心に凄く来た――

俺も全く終わって無かった。

隣に入る香奈出さんは凄いスピードで「終わり」マジでか

「終わったの宿題？」

「はい。こんなの簡単です。」  
じゃ何で今さっき香月に頼んだ？

「優香さんは？・・・終わってるーーーーー」

「優香ちゃん助けてーーーー」

「分かりましたから」

「ありがとう」

優香副会長大変だな  
そんな事より俺も早く終わらせねば  
まだ6日あるから大丈夫

だと思っていたがあつと結う間に6日すぎ

次の日は学校だった。

終わった香月は何処だ~~~~~

今俺誰かに呼ばれた気がする。  
気のせいかな

寝よう

今度こそ何も無く寝た。

## 夏休みの問題（後書き）

次回 学校再び

飛ばした6日の物語は後でエピソードとして出します。

## 学校再び

朝目が覚め起きると

何故俺の上に毎回毎回女の人に乗って入るだ。

これは呪いなのか

誰かが俺を呪っているのか？

呪っている奴が入るとしたら絆だな。

取りあいず起きよう

俺は昭子さんを起こさずに下に行き朝飯を作った。

お世話に成ったしな

フルコースの一部だけなら

料理を作つてメモを残して昭子さんの家を出て学校に向かった。

「んゝゝ・・・」

あれ香月くんは？

私は上からリビングまで見たけど香月くんの姿は無かった。

出て行ったのかな？

机を見るとメモと何この料理？

フルコースの一部を作ったので食べてください。

後此の一周間ありがとうございました昭子さん。

また何時か電話します。

香月より

ずるよ香月くん

香月本家

「おはよう」

「おはようございます。」

今皆で朝飯を取っているところだ。  
それにしても優香さんの料理美味しいな

「今日から学校ですね。」

瑞希会長が頭を押さえながら何か言っている。

「宿題が終わらなかった。」

駄目どころや

香月学校に来るのか？

学校に向かった。

学校

「おはよう」

何で男子の皆俺にその視線送ってくるの？

痛いよ俺泣いちゃうよ

冗談はこのくらいで自分の席に着いた。

あれって……絆か後生徒会皆か

ガラガラガラ>

「おは~~~~って香月何処に行っていた!？」

「ちょっと山を探検してた。」

何だ山か……？

「まあいい。お前が入ないせいで俺大変だったぞ」

苦しみ我が下僕よ

「ああ。」

「ああじゃね——————!?!」

「怒るな五月蠅い、先生が座れたと」  
え．．．．

可哀そくに絆

後学園祭で何をするか決めてください。」

体躯債の時は、瑞希ファンクラブと優香ファンクラブに追いかけてわされた。

「はい。先生良い考えが有ります。」

絆責様俺をうる気か――――！！！！

マジかそれで良いのか？

俺が立とうとした時女子の視線がこっちに向いていた。

駄目だなこらや

OK

俺の心の中

.....!

くそ、生徒会の仕事でこれも駄目だ俺は代理だからな  
今回ばっかしどうにもならん。

その後何が入るか検討をし

結局俺とジュース飲むとかに成った。

他の男子は？

その紙には

香月……ごめん俺人前に出るの無理  
貴様覚えてろSMクラブに提供して遣る。

S Mクラブとは表はM Sクラブである。

何をするクラブか分からない。

だがSMクラブだと結う事は分かっている。

覚えてろよ絆くん

「準備に取り掛かってください。」

「はい」

女子パワー 凄い

男子は「お~~~~~」

下校時刻

俺は生徒会室に向かっている。

何故か分からないが呼ばれた。

何でだ？

着いた。

「こんにちは」

「来たね香月ちゃん待ってたよ。」

何で生徒会メンバが全員が集まって入るだ。

「まずは自己紹介からね。」

「初めまして私は那珂美也 鈴です。」

「俺は・・・」

「自己紹介しないでいいですよ。巧先輩」

「香月てめー舐めてるとしめるぞこら——」

「巧先輩が何か俺に勝てるものありましたっけ？」

確かに俺はお前に全てで負けた。

だが山に行って修行してきた。

有る時は才オカミと戦った。

「よし。表に出ろ！！！」

遣る気かな久しぶりに暴れるぜ

「そこまで先に自己紹介を終わらせてから」

「はい」「くそ。」

覚えてろ香月

「私は新藤 霊歌です。」

男？

「あのう」

「何です香月さん？」

「靈歌先輩は男ですか？」

「女です!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「すみません。」

ふゝ逆鱗に触れた。  
後で謝らないとな

「自己紹介を終わります。次は本題ですが」

この話がまさかの1時間続くとは思わなかった。

「本題を終わります。」

「香月行くぞこらーーーー」

「良いぜ。瑞希さん付き合ってください。」

瑞希さん？香月のヤローーーーー俺が入ない間に何をした!!!!

「いいよ~~~~」

何てノリのいい人だ。

優香さんと絆が入ない。何で？

歩きながら瑞希さんに聞いた。

「瑞希さん」

「何かな？」

「優香さんと絆は？」

「家で晩飯作ってる。」

「ああ晩飯ね。・・・つて待つてそれつてまさか俺の家でじゃ有りませんよね？」

「香月ちゃんの家よ。」

確か瑞希さんは夏休みが終わるまでと言った。何故だ！これでは俺の平和な日常が崩れる。誰か――――！！！！

「後香月ちゃん」

「何です？」

「鈴ちゃんと霊歌ちゃんが泊まりに来るからね。」

- 
- 
- 
- 
- 
- 
- 
- 

え．．．泊まりに来る？．．．

俺の・・・平和な・・・感興が・・・

決めた。家を出て行こう。

香月の家に泊まる？

まさか瑞希会長までもが泊まっていたのか？

そしてグランドに出てタイマンが始まった。

「うーん、あああああ」

巧の右パンチが飛んできた。

くっ！！

何とかかわす事が出来た。

前より強いでもまだ弱いな

「死ねーーーー香月ーーーー!!」

今度は左のストリートが飛んできた。  
だが俺はそれを受け流し  
頭に蹴りを入れた。

くそ！香月覚えてろ

病院行つてらっしゃい。

帰るかと考えていると

「香月ちゃん皆来たよーーーー」

来ないで帰つて

「今日からお世話になります。」  
「」

「いえいえ、こちらこそ」

嫌だな~~~~

女子が5人？男子は我が下僕だけ  
ヤッパリ家を出よう。

家に到着

「ただいまーーーー」

「お帰り香月さん」

何だ此の薄気味悪いオーラは

「お帰り香月」

「お帰り香月」

何だみんなして

「おう。今日から鈴先輩と霊歌先輩が泊まるから」

「え……」  
またライバルが

香月さんは絶対に渡しません。

「上がってください。俺は着替えてきます。」

「はい。」

階段を上がり二階の俺の部屋へ

久しぶりに帰ってきた。

荷物をまとめよう。

出て行く準備をしていると

ガチャ

ボタン！

「誰だ！！」

「私です。」

優香さん……

ヤバイ

「香月さん何処かに行くんですか？」

出て行く何て言えない。

何か言い訳を考えなければ

「友達の家に行くんです。」

「香月さん、まさか昭子さんって人の家に行く気じゃ有りませんよね。」

目が怖い。

これを人はヤンデレと言う。

「行きませんよ。」

「それとも出て行くつもりですか？」

さらに目が怖い

あきらめよう

「はい。」

「香月さん皆に言いふらします。」

待つてーーーーー

俺は咄嗟に優香さんをベッドに着き倒した。

こうなったら遣るだけ遣る

「それは困るんですよねー優香さん」

香月さん等々私を襲うのね。

俺は優香さんに近づいた時

ガチャ

「香月ご飯出来た・・・・・・・・・・・・・・・・」

え・・・・・・・・

何で毎回俺は間が悪い時に人が来るんだ。

「香月何をしてるの？」

何故香奈出がこんな所に！？

しかもこの状況は不味い。

俺が優香さんを押倒している状態だ。

言い訳を・・・・！

「エクササイズ教えて持っていたんだ。」

「そうなの？」

「はい。」

何だ良かった〜

「早くご飯食べに入こ」

「おう」「はい。」

下に行くと生徒会メンバーが入る  
机皆座れないな。

外で飯食うか

皆が「いただきます。」  
「皆」

「香月何処に行くんだ？」

皆が俺を見る

「俺今日バイトじゃ」

「おい。香……」  
「バタン」

ふ〜〜〜外で飯食うって言うたら絶対に皆着いてくるからな

外を歩いていると

小さい女の子がよって来た。

「おにいちゃん助けて」

「どうしたの!？」

その子は気絶した。

何だ？女子が来た方見ると黒い服を着た奴らが2人いた。  
香奈出SPか？嫌違う「誰だ!」

「その子を渡せ」

黒い服をきた奴らが言った。

「断ると言ったら」

「力ぞくでも手に入れる。」

黒い奴らが走ってきた。

だけどこの女子を見捨てれない。

右からパンチが飛んできた。

俺はそれを左腕でつかんで背負い投げした。

2人目は俺がそいつに夢中になって入る時俺後ろに入た。

「何故この子を狙う」

「貴様に答える必要はない。」

「それじゃ」

黒服2人目の手をほどき離れた。

俺もしかして不幸？

まあいい

「死ねーーーーー」

2人目の顔面に蹴りを入れて気絶させた。

ふゝゝゝ何とか終わった。

この子早く連れて帰るか

俺は少女をかかえて急いで家に戻った。

「ただいま」

「おかえ．．．．っ！！」

「誰です？」

「途中で助けた女の子手当てを頼む」

「ええ。何処に行くの？」

「ちょっとな」

再び家から出てさっきの奴らが倒れて入る場所に向かった。

入ない！

一体奴らは何者なんだ？

## 学校再び（後書き）

感想ください。

私の名前は刹羅です（前書き）

おくれてすみません

私の名前は刹羅です

「う……ん」

「起きた！大丈夫？」

「香月……お兄ちゃん？」

え……この子僕の事知ってるのか？

「うん。」

「私……刹羅だよ。」

刹羅……！

「刹羅ちゃん」

この子は7年前香奈出引つ越してからその後に来た子  
この子には姉がいて名前は確か……刹那

「刹羅ちゃんどうしたの？」

「香月お兄ちゃん、お姉ちゃんを助けて」

「一体何があつたの？」

「お父さんが私たちを嫁にだすって言つたの」

刹羅ちゃんのお父さんが？ 優しそうな人だったのに  
「なんで？」

「会社が倒産したから」

「それだけで」

「うん。だから私逃げて来たの」

「刹那は！！！！？」

「お姉ちゃんは私を逃がすために捕まったの」  
「会社が倒産しただけで娘を嫁にだす。……ふざけるな！！！！」  
「人生は親が決めるものじゃない。自分で決めて歩んでいくものだ。」

「お父さんはどこにいるの？」

「会社にいる。」

「つれもどそう。まずは銀行だ」

「わかった。行ってくるから寝ていて刹那ちゃん」

「うん。」

「眠ったか、行くか刹那を助けてに」

「俺が部屋を出ようとした時香奈出が」

「これ持っていきなさい」

「渡されたのは……これ！！」

「ダメだこれはお前の！」

「いいから持ってて」

「わかった。きつと返す」

「うん。」

俺は家を出て会社に向かった。

<  
>

「刹那お前が嫁に行くのは、仕方が無いんだ。」

「・・・・・・・・」

いやだ。行きたくない。

「この人だ」

写真には、金持のおぼっちゃまの写真が

「いまから此の人がくるから」

いやだ。・・・・・・・・助けて

タタタタタ

嫌だ。

ドン!!!!!!!!!!

「その話しちよつと待った――!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」  
「!!!!!!!!!!」

「君は一体誰だ!?!」

「俺は香月です。その結婚の話待った！」

香月……！

「香月！」

刹那元氣そうで何よりだ。　まだみたいだな

「君か、なんのようだ？　今忙しいんだが」

「娘さんの結婚を止めていただきたい」

「何を馬鹿な事を言っている！　刹那が嫁に行けば会社がつぶれなくて済むんだ！」

「自分の娘の人生を勝手に思い道理にするな！」

「もういい。つまみだぜ」

「じゃ、この会社が倒産しなければいいんだな」

「なにを言いだすかと思えば、そうだな」

香奈出ありがとう。必ず返すからな

「俺がこの会社を買う！」

「何を馬鹿な！？」

俺は持っていたケースを机の上においた。

「なに！？　これは・・・まさか　井上会社の」

「刹那は連れて帰ります」

「・・・刹那を頼む」

「わかってます」

「刹那行くぞ」

「う、うん」

「一体香月何をしたの？」

<外>

「あちゃゝ電車終電もうでてる」

「香月一体何をしたの？」

「あの会社の社長になった」

「え・・・！　嘘だよね？」

「本当だ。これ」

紙を見せた。

本日よりこの会社の社長は、夢下 香月に変わった。

「凄い、香月」

刹那が飛びついてきた。

どうしよう？

「刹那」

「なに？」 7

「今日、ホテルに泊まらないか？」

「いいよ」

よかった。刹那はまともだな、でもその前に

「刹那、飯食べたか？」

「まだ」

近くにレストランはあったけ？ 携帯を開き地図を見た。

ここから三分だな

「じゃあ、食べに行くか」

「うん」

俺と刹那はレストランに向かい夜飯を食べた。

<香月の家>

香月大丈夫かな？

香月さん

香月ちゃん

皆香月を心配していた。

「香月お兄ちゃんは大丈夫。」

皆の顔が笑顔になった。

「そうだね」

「そうですね」

「そうだ。香月ちゃんは大丈夫」

「お腹すきましたね」

優香さんが夜飯を用意してくれた。

「「「いただきます」」」

夜ご飯を楽しんでいた。

<香月&刹那>

「すみません。一晩泊まりたいんですけど」

「二名様ですね。こちらへどうぞ」

これでOKだな

そつだ！ 香奈出達に電話しないと

部屋の中に入るとすぐに電話をだして、香奈出に電話をかけた。

「もしもし香奈出？」

「どうしたの？」

「刹羅ちゃんに変わってくれないか」

「いいよ」

「香月お兄ちゃん？ お姉ちゃんは？」

声を聞かせてやるか

「刹那、刹羅ちゃんが声を聞きたいだって」

「もしもし刹羅？」

「うん。」

「よかつた。今何処なの」

「香月お兄ちゃんの家」

香月の家なら安心

「じゃあ、香月に変わるね」

「うん」

「刹羅ちゃん、今日は帰れないって伝えといて」

「わかった。ばいばい」

「またね」

ブチ

ふうこれで風呂に入って寝るか・・・・・・・・・・後ろを振りかえる  
とベットが一つしかないのだ。

「え・・・・・・・・マジで」

「どうします？香月」

どうするって言われても……ここは

「刹那が布団使えよ」

「香月はどうするの？」

「ソファで寝るよ」

「香月も一緒に寝よ」

「……これはデジャブか、いやきつと刹那は違う」

「じゃあ、先に風呂はいれよ」

「うん。」

刹那は風呂に入りバスルームに行った。

「疲れた——もうくたくた」

でも、刹那可愛くなって入たな。ダメだこんな事考えちゃダメだ

10分後

「香月、はいつて良いよ」

「うん。わかつ……って刹那何て格好してんだ!？」



香月が違つ女と一晩一緒に寝るの

香月さんがホテル

香月ちゃんが寝る

香月のヤローうらやましい

<風呂>

「ハックション！」

誰か俺の噂でもしているのか？ まいいや上がろう

風呂から上がりリビングにもどった。

「うっ！」

刹那が可愛い。優香さん以上に胸もあるし可愛い。やばい

「寝るか」

「うん」

お互いに違つ方向を向いて寝ている

「香月、起きてる？」

「起きてる」

「ありがとう今日は」

「いって」

ムギユ

刹那と体が密着している。

一体何が………？

「今日だけこうさせて」

「うん」

そのまま眠りについた。

私の名前は刹羅です（後書き）

次回 ここが刹那と刹羅の新しい学校

## ここが新しい刹那と刹羅の学校

朝

「うーん。なんだこの良い感触」

俺の手に何かが当たっている。この感触嫌な予感がする。

手の方を見ると・・・刹那！　なんでこっちに来てんだ？

そんなことより、手をこっさりどけて、

「何とかセーフ」

「うーん、もう朝ですか？」

「朝だよ刹那」

「香月！？」

そうか昨日私達ホテルに泊まったんだ。

ピピピ

んーなんだ？

「あ、はい。」

「朝食の用意が出来ました。」

「わかりました。すぐに行きます」

「刹那着替えろ」

「うん」

刹那の住む家も探さなきゃな。でも、俺あその会社の社長になったのか？ 実感わかないな

後ろを振り向く俺

「って、なんでここで着替えてんだ!？」

「だって香月が着替えてって言ったから」

「俺が外で待ってるから、着替え終わったら来てくれ」

「わかった」

なんで香月私を見て顔を赤くしてたんだろう？ でも、可愛かったな香月

「ハアハア、」

破壊力張りすぎだろ。刹那

待つこと5分

ガチャ

「おまたせ香月」

「じゃあ、行こうか？」

「うん」

俺達は、食堂に向かった

「美味しいねこれ」

嬉しそう。

「そうだな」

それから10分、俺達は、朝飯を食べ終わり家に向かった。

<香月の家>

香月の奴がいないと飯がここまで限られるとは、カムバック香月

<刹那&香月>

「そうだ！ 刹那と刹羅ちゃんの着替えあるのか？」

「ないです」

早！

「じゃあ、着替え買って帰るか？」

「お金在るの？」

「大丈夫だ」

「じゃあ、お言葉に甘えさせていただきます」

俺と刹那はショッピング・モールに向かった。

「ここがショッピング・モール。大きいですね」

「そうだな」

ここに来るのは、何年ぶりだ？ 嘘です。つい最近来ました

「それじゃあ、必要な物買って帰るか」

「はい」

<香月の家>

「ここが香月お兄ちゃんの部屋」

「なんで刹那って香月の事お兄ちゃんって呼ぶの？」

香奈出が言い始めた。

「えっとね、香月お兄ちゃんがそつしろって言ったから」

香月、ロリコンだったのね。

<香月&刹那>

「この服似合うんじゃないか？」

「試着してみるね」

「ああ」

誰かが俺の変な噂しているな

すると

「どうです香月？」

言葉がでない。

「凄く可愛いよ刹那」

「香月・・・」

「そこのお客様さん」

店員さんが何か言ってきた。

「この服来てください」

「はあ、分かりました」

言われたとつりに服を着ると

「お客さん似合ってますよ」

刹那を見ると・・・もしかしてピアルック!?

「でも、好いかもな刹那と一緒にって」

俺、何考えているんだ!

「香月・・・」

なんでそこで顔を赤くする?

「これください」

マジか!? 刹那が俺と試着した服を買った。

なるようになれ!

「帰るか? 刹羅ちゃんも待ってるし」

「そうですね」

俺と刹那は買い物を済ませ家に帰るとこ

< 香月の家 >

「香月お兄ちゃん」

「香月」

「香月ちゃん」

「香月さん」

「香月くん」

「かつうち」

皆が悩んでいると、カチャ

ドアの鍵が開きそこから

「ただいま——」

「お邪魔します」

俺は部屋に入りリビングへ

ガチャ

「ただ……なんだこれ」

部屋がめちゃくちゃ

「香月どうしたの？」

刹那が俺に質問をしてきた。

「刹羅ちゃん、刹那俺の部屋に行つてて」

「うん。刹羅いこ」

「うん」

ふたりが二階に上がるのと同時に

「お前ら家から出て行け！！！！！！」

みんなを家の外に追い出した。

「どうやったら、こんなに散らかるんだ」

一日で。俺はリビングの部屋の掃除を始めた。うわぁ、台所もめちゃくちゃ

10分後

ガチャ

「入って良いぞ」

「「「「ありがとう」「」「」

「刹羅、刹那降りてきていいよ」

あれ、・・・返事がない。俺は二階に上がった。

「刹羅、刹那、入るぞ」

自分部屋のドアを開けると

「・・・・・・寝ていたか」

まあそうだな。あんな事があつたんだから、今はゆっくり寝かせてあげよう。

<一階リビング>

「香月、刹那さんは？」

絆お前には絶対に教えない。それより

「部屋を散らかしたのは誰だ！？」

生徒会メンバーが全員が手を上げた。よし、追い出そう

「今すぐに出て行け」

「「「「無理です」「」「」

こんな時だけ意気がぴったり。うざい、取りあわず、晩飯の準備だな  
「お前らはDVD部屋にいろ！」

そろそろ部屋を出て行つた。

さてと料理と学校の手続き済ませないとな。刹那と刹羅喜ぶかな

今日の晩飯は・・・冷蔵庫の中に何も無い。

この事を考えて俺は食材を買ってきた。今日はすき焼きだ。刹那と  
刹羅の歓迎パーティー

ふ~~~~さすがに一人で準備するには時間がかつたな

時計を見ると夜の8時になっていた。みんなを連れてこないとな

まずは、DVDルームにいる生徒会メンバーを呼びに行く

「おい、飯の準備出来たからこい」

「~~~~~はい」

絶対にコイツらだけでも追い出す。

次は二階に行き。コンコン

「入るぞ。刹那、刹羅、起きてるか？」

「うん。私だけ起きてる。刹羅はまだ起きてない」

「そうか、起こして下ですき焼き食べよう」

「う．．．ん」

なんだ？ まいいや

「刹．．．．」

俺が刹羅を起こそうとしたとき刹那が止めて来た。

「なんだ？ 刹那」

だんだんと刹那が俺に近づいてくる。この転回まさかな

「！！？」

あれ、今俺の唇と刹那の唇が重なってる。下から誰かが来ているのが分かる。ヤバイ、今見られたらヤバイ

俺は扉を抑えた。キスしている状態で、そろそろやめてくれないかな．．．．

「！！？？」

今度は俺の舌に何かが絡まる。．．．．．

俺は刹那との距離をとる。部屋のドアが吹っ飛んだ。

「勝手に俺の部屋のドアを壊すな!!」

「うん。香月お兄ちゃん」

「香月早くご飯食べたい」

「分かったから下に降りて入ってくれ」

「うん」

「私もご飯食べる」

刹羅も続いて出て行った。

「刹・・・那、さっきの・・・」

「お礼です。後・・・」

小さくて聞き取れなかった。取りあはず下に行こう

「香月来たのか、早く食べよ」

バカかお前、俺はいらない。外で食べてくるから

「今日もバイトだった。じゃあ」

「香月、私達どこで寝れば、いいですか?」

「今日は俺の部屋で寝ていいよ」

「部屋用意するから」

「はい！」

嬉しそうだな

「香月、どういう事」

来たーお金持ち最強の香奈出様だ。

「刹那と刹羅は今日から此処に住む事になった」

「『『『『『『え——！！！！！！！！』』』』』」

またライバルが増えるの

「まいいや、じゃあ、そういうことで」

俺は家を飛び出た。あそこに入ると命がいくつあってもたらない

今、俺は、マクドナルドにいる。

「はあ」

ため息を付きながらハンバーガーを食べる。どうしよう？ バイト増やすか？

本気でお金が持たない。俺は通帳のお金は使っていない

絶対に使ってはいけない気がする。

でも、あの家に9人は狭いな、家でも借りて一人暮らしでもするか  
ハンバーガーを食べ終わり家に帰った。

帰りの途中で家の値段をみて帰った

<香月&刹那&刹羅の家へ香奈出も>

「美味しいですね！」

「香月さんに言うてください。その言葉」

自己紹介は済ませておいた。俺が

「でも、まさか香月、ここまで料理がうまくなるなんて」

「もしかして昔下手だったの？」

「はい。それとても食べれる物ではありませんでした」

香月も私がない間に成長したんだ。へ香奈出へ

香月さん、初めは料理出来なかったんだへ優香さんへ

ガチャ

「ただいまー」

香月が帰ってきた。

俺は、リビングには行かずに部屋に戻った。

「あれ・・・香月がこないぞ」

「なんで？」

「なんでしょう？」

みんな同じことを言いながら香月の部屋に向かう。

いつでも出て行けるように準備をしていた。

コンコン

「誰？」

「刹那です」

「入っていいよ」

ドアを開けて入ってきたのは、本当に刹那だった。

「香月、何してるの？」

「この部屋の物を違う所に移すから」

「ごめんなさい。私のせいで」

「いいよ。別に」

今日からお前たちはここで生活するのだから

「でも、なんで段ボールなんです?」

「これが一番運びやすいから」

そして、10分で俺の物を片付けて俺の部屋を出た。

まあ、玄関でも置いとくか

下に降りて玄関に物を置くと

「香月、その荷物なに?」

いいタイミング。香奈出、お前は本当になんなんだ!?

「俺の私物。DVD部屋に持って行く途中」

「そうなんだ」

なんだ。あの疑いの眼わ。

疲れた。重たい。バイト増やそう。今やっているバイトが新聞配達とコンビニだ。

後一つ増やそう。

今月の給料が入ったら家を出て行こう。

決意を改め、明日の準備をしていた。

朝

「ん~~~~平和・・・朝!!!!!!」

なんで俺の隣に優香さんがいるんだ！ 確か俺DVD部屋に鍵をかけて寝たのにドアを見るが鍵は閉まっている。

え？

「香月さん、起きましたか？」

「呑気に言わないでください」

しかも、何故裸！？ 本当に目の遣り場に困る。

「おはようのキスしてください」

「無理です。それじゃ」

足を掴まれ

「香月さんの秘密ばらしますよ」

ジョーカー来たか……ダメだ思い着かない

「わかりました。目をつぶってください」

目をつぶった事を確認して、ホッペにキスを使用した時

「香月さん、それはルール違反。こっちです」

ぶ！？ また唇と唇が重なっている。しかも舌が口の中に入ってきた。

「な、なにを」

コンコン

「香月、起きてますか？」

刹那だ

「起きてる」

「開けていいですか？」

仕方ない

「ごめん。今エロDVD見てるか」

「香月、わたしの体でよければどうぞ」

刹那まで、俺の周りにいる女子はおかしい

優香さんをどけてドアを開けた。

「どうしたの刹那？」

「朝ご飯出来たから呼びに来たの」

「着替えて行くから」

「はい。」

刹那がリビングに行く事を確認して

「はあ」

目の前には優香さん

「今すぐリビングに行ってください」

「わかりました」

そうだった！ 刹那と刹羅にこれ……

<  
>

「いただきます」

食卓を皆で囲む。何故こんなに人数が増えたのか

まあ、家を出ていく俺には関係ないか

「刹那と刹羅後で俺の部屋に来てくれ。みんなは先に学校行つててくれ」

「「「「「わかった」「」「」「」

みんなは不思議そうな顔をしながら言った

ガチャン

家から俺と刹那と刹羅以外が出ていくことを確認して

「刹羅と刹那、これ着てくれ」

「え・・・これって」

「いいから」

「「うん」「」

俺が渡したのは制服だ。俺の学校の皆驚くぞ

<そのころ学校では>

「なんで香月のやつ」

まさか！

「あいつ一人で楽しむつもりじゃ。グハア」

香奈出さんに殴られた。

「そんなわけないでしょ」

職員室

「それじゃ行くぞ刹那、刹羅」

「うん」

教室前

まず先生が中に入り

「はい、着席。今日は皆に転校生を紹介する。入ってこい」

ガラガラ

「始めました。夢下 香月です」

「ぶーーーーー」

男子からブーイング嵐

「お前ら少し見ない間に成長したな」

一気に空気が重くなる

「いいから、香月くん早く座れ」

「はい」

「あれ、冗談じゃないの」

緊張するな。

「入ってきて」

ドアを開けた入ってきたのは

「初めまして、双竜 刹那です。」

「双竜 刹羅です。」

教室からつおおおおおきたーーーー美人きたーーーー  
という言葉が出できた。

はい。そうですね。芸能人にでもなられ美系です。

「どこに住んでいるの?」

「香月の家に泊めてもらってます」

皆の視線が俺に突き刺さる。

また香月がよーーという言葉も聞える。言った奴後で女子便いきの切符だな

「それじゃ席は、香月の後ろに机置いておいたから」

「はい」

これからの学校生活が楽しみだ

まさかの！？

今学校が終わり下校中

「それで学校はどうだった刹那、刹羅」

「いいところですね」

「そうだねお姉ちゃん」

よかった。これで普通の日常に戻る。

「ねね、香月」

「なんだ香奈出？」

「今からどっか遊びに行かない皆で？」

現在の時刻三時半

どうしようか？・・・・・・外で飯食えばいいか

「いいぞ。刹那、刹羅、優香さんどうする？」

「いいですよ」

「私も」

「私もいいですよ」

よしこれで全員だな

「ちよつと待った——！！！！私達を無視しちゃダメだよ。香月ちゃん」

「……………」

俺は無言のまま走りだした。

「くら！　まてー」

結局直ぐに捕まりカラオケに向かった。

<  
>

さてと人数が……………8人か。

「じゃあ、俺と刹那と刹羅で入ります。絆と瑞希さんと鈴で優香さんと香奈出と霊歌さんでよろしく」

皆自分のボックスに入っていく。

無論俺のすることは

電話を取り

「あ、すいません。コーラとポテトとピザとラーメンお願いします」

電話を置き歌を歌い始める。俺は歌わない。

「刹那、刹羅、お前たちの歌聞かせてくれよ」

「う、うん」

「いいよ。お兄ちゃんの為なら」

「刹羅、お兄ちゃん止めてくれ。加津佐って呼んで」

「えー、まあいいけど」

いい加減にお兄ちゃんって呼ばれるとクラスの視線が痛い。

そして、刹那と刹羅の歌が始まった。

「導いて僕の」

しかもふたりで歌っているよ。息びったり。さすが姉妹

<  
>

「優香は何歌うの？」

「何にしようかな？」

目線が違う方を向いているのに話している。多分かづちの所が気

になるのであろう。

「じゃあ、私から歌うね」

鈴が言ってボタンを押し音楽が始まった。

「  
~~~~~」

あれ、歌詞がない。そんなカラオケ合っているの？

<
>

「香奈出さんは何歌うの？」

「
~~~~~ん」

話がかみ合っていない。

「瑞希会長は何歌うの？」

「  
~~~~~ん」

こっちもダメだ。

（仕方ない。ここは俺が歌うか）

音楽が始まり歌う。

「僕のクエストは今はまだ……」

ブチ。いきなりである。音楽が途中なのに止まった。誰だと思ってみると……香奈出さん

香月助けて

<夕方>

「ふ〜〜面白かった」

「そうね香月」

「またこようね。お姉ちゃん、香月」

「ああ」

「うん」

香月達はいきいきとした顔をしているが他の皆は

「はあ〜〜〜」

「はあ〜〜〜」

そうゾンビみたいだった。

バスに乗り

家に到着

「ただいま〜って誰もいないか」

「おもしろいですよ。香月」

「そつだよ香月」

「先に風呂に入ってこいよ。女子全員」

「「「「はい」」」」」

なぜこの時だけ皆返事をする？

みんなが風呂場に行くと絆がその後を追っている。

「絆、覗いたら死ぬぞ」

「覗かねえよ」

とか言いつつも覗いています。

晩飯の準備。

今日のメニューは、麻婆豆腐とチャーハンとラーメンと餃子だ。

刹那と刹羅の飯はフルコースの一品を出すつもりだ。

そしてみんなが風呂に入って上がり晩飯をいただく

「なんで！ 刹那と刹羅ちゃんのは違うんだよ！」

「当たり前だ！ お前らなんか俺にしてくれたか？」

「……そ、それは……………」

無言になり

「いいから食え。俺今日もバイトだから、じゃ」

と言って皆の前からいなくなる。実際に今日はバイトだ。

「香月の奴、絶対に地獄に落とす」

小さい声で絆がつぶやいた。

「いただきます」

刹那が言っ て食べ始めた。

「おいしい！ これおいしい」

「そうなのお姉ちゃん？」

「食べてみて」

「うん」

そう言っ て口の中にスープを流し込む刹那

「おいしいね。 本当に」

それから無言のまま食事はすすんだ。

<
>

今日のバイトは………なんだっけ

「………コンビニか」

自転車に乗っ てコンビニ向かいバイトを始める。

「おはようございます」

「ああ、おはよう。頼むよ今日も」

「はい。お疲れ様でした」

コンビニのバイトは俺一人この時間対に入る人がいないのだ。

「いらっしゃいませー」

お客さんだ。女性、年齢は17くらいだ。黒髪のロング。

俺と同じ年かな？ でも可愛いな。

商品を持って来て

「これください」

「あ、はい」

ピツと、レジをして袋に入れる時

「君が香月くんだよな」

「そうですけど、何かようですか？」

「バイトの依頼してもらいたいのですけど？」

「いいですよ」

まさかこの俺を知っている人がいるなんて、まあ普通か。この街で何でもしますという張り紙をしているのだから

「これ番号です。後で電話くださいね。香月くん」

「あ、はい」

その女性から紙を貰い。女性は出ていった

まさかバイト中にバイトを頼まれるとは。

それから3時間後

「あがつていいよ」

違うバイトの人がきたらしい

「お疲れ様でした」

コンビニを出て自転車で帰る途中に公園によつて

ピピピ

「これで」

電話をかけて

「あ、もしもし香月ですけど穂波さんですか？」

『あ、そうです。電話ありがとう』

「それで内容は？」

『これから私の家に来てください。……………ここです』

「わかりました」

いきなり家に行く用件かなんだろう。掃除かな？

取りあいず、自転車に乗って向かった。

「……………」

そう目的地に着くと俺は無言になってしまった。

「でか!!!!!!!!!!」

お屋敷かと突っ込みたいくらいでかい

俺の家の倍はあると思う。

インタホンをならす。

『どちらさまですか？』

「香月です」

『待っててください』

と言われ待つと扉が開かれ

「どうぞ中へ」

「あ、はい」

お父さんとお母さんいないのかな？

中にはいり彼女の部屋に向かう

「紅茶をどうぞ」

「どうも。それより依頼は何ですか？」

「あの、その……」

どうしたんだろう？ 喋れないことなのかな？

「なんです？」

「私も貴方の家に住まわせてください」

「え！？」

その発言は俺をびっくりさせた。

まさかの！？（後書き）

次回は香月の誕生日です。

遅れました。いろいろ小説を書いているので遅れました。

見てください

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1596r/>

お金持ちのお嬢様がやってきた

2011年5月25日18時58分発行